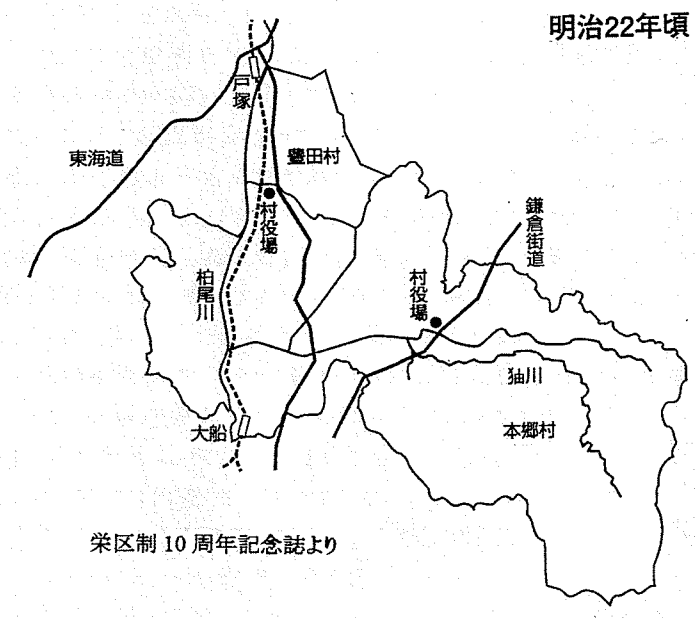
栄区の地名の由来を考える

明治22年頃



栄区制 10 周年記念誌より

六人会

栄区の地名の由来を考える

平成 19 年 10 月

近年、急激な開発により、人口が増加し、住宅が増えると、それまでの町名だけでは混乱を招く事態となって、新しく住居表示が実施されるようになりました。

その結果、町名の変更が多くなり、それは便利にはなったかも知れませんが、その反面、それまでどの町だったのか、分かりにくくなってきました。

又、以前はその地に住む人達に親しまれていた小名も、新住民は勿論のこと、地元の方でも知らない方がふえてきました。

宅地造成で山は削られ、谷は埋められ、川も暗渠になって、かって川が流れていたことさえ忘れられようとしています。

地名の多くは地形や自然現象から付けられているといわれますが、栄区内の地名を調べている時、それを実感しました。

考えてみれば、人類が姿をあらわした頃から、現代に至るまで地形はいつも身近にあり、地名の多くは地形から名づけられたのも当然でしょう。

人が二人以上集まればあの川、この山では通じなくなり、その地形の特徴をとらえて皆が納得する地名が出来たのでしょう。比較的多いと思えたのに、上・中・下と東西南北があります。その他、伝説、信仰、支配者、城・砦、寺社、動物や時代などから付けられた地名もあります。

地形も長い年月の間には地震や災害によって変化したり、文字も当て字だったりで、由来や語源をさぐるのは容易ではありません。

新編相模国風土記稿に小名として地名が記載されていても、それが何処なのか、現在では所在地も判然としないのも多くあります。

町名や小名の文字も簡単なようでも土地での「読み方」があり、難しく思えますが、この「読み」にも理由がある場合もあり、おろそかに出来ません。

歴史的な意味を持つ町名や小名などの所在地や由来を現在、分かっている範囲だけでも調べ、後の世に伝えて行くのも今を生きる私たちの務めではないかと思います。

町名や小名の由来を知り、関心と興味を持って頂ければ、それが栄区に対する愛着の一助となるのではないかと思い、以前から少しずつ調べてきました。まだ発表するほどまとまってはいませんが、図書館からの依頼で町名の由来をお話するのを機会に記しました。

間違いのご指摘、ご叱責、情報などを頂ければ幸いです。

栄区地名一覧表と地名の由来を考える

栄区(さかえく)昭和 61 年 11 月 3 日設置

昭和 61 年、行政区再編成にともない、旧戸塚区の本郷地区と豊田地区(上倉田・下倉田を除く)の地域で新設されました。区名は公募により、本郷区、南戸塚区、湘南区、栄区、桂区、大船区、根岸区、光区、戸塚南区、上郷区から選定し、本郷、豊田両地区の繁栄を期し、新しい区として未来に向けて、大きく栄えて行くことを祈願し、明るく、華やかなイメージのある、簡潔で、語調もよい区名を決定しました。(横浜の町名平成 8 年発行より)

本郷 (ほんごう)

本郷とは郷の中心であり、最初に開け付近の発展の基礎となった土地をさすといわれます。本郷の名は文保元年(1317)の證菩提寺文書に「**山内庄本郷**」とあるのが最古です。**上之(上郷)・中之(中野)・鍛冶ヶ谷・小菅ヶ谷・桂・公田**の六ケ村は江戸時代の正保の改(1644－1647)まで本郷六ケ村と総称されていました。

本郷は北は日野、東は峰・氷取沢・釜利谷に、南は鎌倉、西は笠間・飯島に囲まれ、独川が東から西に流れています。

明治 22 年の市町村制施行の際、この六ケ村に笠間村を加えて鎌倉郡本郷村を成立させ、村名は大字となりました。(例えば本郷村大字公田)

昭和 14 年、横浜市に編入し、戸塚区○○町と、それぞれの村が町になり、本郷村はなくなりました。

昭和 61 年、かっての本郷村と豊田村(上倉田・下倉田を除く)が合併し、戸塚区から分区して栄区が誕生しました。

現在、本郷の名は、飯島町と小菅ヶ谷町の一部から新設された町、本郷台に残されている他、駅名やバス停、学校などの名称として残されています。

豊田(とよた)

豊田地区は**上倉田・下倉田・長沼・飯島・金井・田谷・長尾台**の 7 カ村の総称ですが、北は戸塚町・吉田町(栄区では下倉田)・東は小菅ヶ谷町(現在は本郷台)、南は笠間町と鎌倉市玉縄・岡本に、西は原宿・小雀町に接しています。上倉田・下倉田・長沼・飯島と、金井・田谷・長尾台

の間を北から南へ東海道線と柏尾川が並行して貫ぬいています。

明治 22 年の市町村制施行の際、上倉田・下倉田・長沼・飯島が合併して豊田村が生まれました。

大正 4 年、この豊田村に、金井・田谷村・長尾台村が合併し、7 つの村が神奈川県鎌倉郡豊田村として 1 つの村になり、それぞれの村は大字となりました。豊田の地名は実り豊な田であって欲しいという農民の願いからつけられたものです。昭和 14 年、豊田村と本郷村は横浜市に編入し戸塚区○○町とそれまでの村名が町名になり、豊田村はなくなりました。

昭和 61 年、かっての本郷村と豊田村(上倉田・下倉田を除く)が合併し、戸塚区から分区して栄区が誕生しました。

かっての上郷町の範囲

上郷町　長倉町　庄戸　東上郷町　尾月　犬山町　上之町　亀井町 元大橋 2 丁目　若竹町の一部　野七里 1－2 丁目　桂台の一部

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

本郷(ほんごう)・上之(かみの)・森の木(もりき)・桜井(さくらい)・大芝原(おおしばはら)・庄戸(しょうど)・中島(なかじま)・長倉(ながくら)・長者久保(ちょうじゃくぼ)・深田(ふかだ)・猿田(さるた)・柳坪(やなぎつぼ)・南河内(みなみこうち)・六反町(ろくたんまち)・阿ふな(あ)・石原(いしはら)・瀬上(せがみ)・瀬上谷(せがみやと)・神戸(ごうど)・野七里(のしちり)・野七里谷(のひちりやと)・矢沢(やざわ)・稲荷(いなり)・西ケ谷(にしがや)・いの山(やまい)・犬の山・亀月(おづき)・亀井(かめい)・宇津尾掘(うつおぼり)・大堀(おおぼり)・猪鼻(いのはな)・田所(たどころ)・竹内(たけのうち)・梅沢(うめざわ)・後田(うしろだ)・子神前(ねのかみまえ)・坂中(ばんちゅう)・鍛冶ヶ谷口(かじがやくち)・房中(ぼうちゅう)・新福寺(しんぷくじ)・中房(なかぼう)・薬師堂(やくしどう)・経堂(きょうどう)・ぢんがん堂(じんがんどう)・高塀(たかへい)・西行坂(さいぎょうざか)・馬場(ばば)・番匠面(ばんじょうめん)・殿畑(とのはた)・うとう田(だ)・中台(なかだい)・山王台(さんのうだい)・柳作(やなぎさく)・狐塚(きつねづか)・地蔵堂(じぞうどう)・鍛冶ヶ谷台(かじがやだい)・宮ケ谷(みやがやと)・猪尾(いのお)・押切(おしきり)・首切(くびきり)・關ケ谷(せきがやと)・八軒谷(はちけんやと)

(「由来を考える」はこの地名の順序通りではありません。現時点で解らないのは記してありません。**強調したい文字は太文字にしています)**

上郷町(かみごうちょう) 昭和 14 年 4 月 設置

新編相模国風土記稿上之村の条に「此地は郷中の東、上の方にあるを以て今の村名を追いせしと云」と記載され、上之の村名は本郷の中でも上(かみ)の方にあるので上之と呼ぶようになったと記されています。

正保の改(1644－1647)で、上之村になり、明治 22 年、市町村制が施行されると、本郷六ケ村(上野・中野・鍛冶ヶ谷・小菅ヶ谷・公田・桂村)に笠間村を加えて、この七ケ村によって本郷村となり、それまでの村名は大字になりました。(例えば本郷村大字上野)

上之村は上ノ村とも記されていましたが、明治になって上野に改めました。昭和 14 年本郷、豊田などの旧鎌倉郡は横浜市に合併し戸塚区となり、「本郷村」はなくなり、村名が町名になりましたが、「上野」は中区に「上野(うえの)町」があり、紛らわしいということから旧村名の「**上**野村」の**上**と、前村名の本**郷**村の**郷**をとって「**上郷**」となりました。

横浜の町名(昭和 57 年発行)に「この町の地域は古の本郷六ケ村の原村であるとの考えによる」と記されています。

平成 8 年発行の「横浜の地名」に、町名は「上野町」が既に中区にあるため、旧村名「上野村」の「上」と、前村名「本郷村」の「郷」を結びつけて「上郷」と名づけた。と記されています。

上郷町は相武トンネルから本郷小学校近くまであったといわれますが、開発に伴い、沢山の新しい町が誕生しました。

長者久保(ちょうじゃくぼ)

栄環境事業局後方辺りの地名で、大丸山や大平山と続く山並みに三方を囲まれた上郷の奥地をさしています。「本郷の民話と伝説」の中に「茶がら長者」として、「長者久保にお茶の好きな長者が住んでいて飲んだお茶の茶ガラで塚が出来た」。と記されていますから伝説からつけられた地名と思えます。当時、お茶は貴重で中国から来た禅僧が薬として飲み、一般の人達にも広まったといわれます。

長倉町(ながくらちょう) 昭和 57 年 設置

昭和 57 年の住居表示施行にともない、上郷町の一部から新設された町ですが、地元の要望で字名を町名として誕生しました。(横浜の町名 平成 8 年より)

長倉町後方の山を長倉山と呼んでいますが、倉は崖とか岩を意味するといわれ、その長く続く堅い岩肌の山を長倉山と呼ぶようになり、それが字名となっています。

神戸(ごうど)

昇龍橋辺りから長倉町辺りまでの小名を神戸といいます。風土記稿に「昔は小名鍛冶ヶ谷口所在の字を神戸と云ふ、・・・今の地に遷座ありしは正中元年(1324)」と記され、その際、地名の神戸も共に移されたといわれます。「神戸」と書いて「コウベ・カンベ」と読む場合の多くは神社に租税を納める民戸の意味ですが、「ゴウト・ゴウド」などは、川の渡し場・郡家(こうと)(郡役所)をさすといわれます。

白山神社が本来鎮座していた鍛冶ヶ谷口は現在のバス停本郷辺りとされ、

昇龍橋の先に残されている跡地に遷座された際、地名の神戸も共に移されたと伝えられています。そうすると、本来の神戸はバス停本郷辺りの地名となります。郡役所があったのではないかという説、神社に付属した戸による地名、ゴウ(川)・ド(処)で、川のある所の意味ではないかという説などがあります。

野七里・野七里谷(のしちりやと)1 丁目・2 丁目 昭和 59 年 設置

野の語源として野原、荒野、自然のままの地、野良、山の裾野、人里に対して開かれていないことに注目していう、あるいは人里と山の間をいうなどがあります。七里の七について、長いとか、数多い場合、七とか八が使われる例が多いようです。

上郷の八軒谷戸などは家が八軒しかないところから生まれた地名です。

七里について、唐制による六町一里の数え方があり、大道の一里は三十六町、小道の一里は六町で数えたようです。例えば鎌倉の七里ガ浜ですと、稲村ガ崎から小動崎までをいいますが、野七里の場合、長さの起点と終点が分かりません。本来、「七里」には長い道のりの意味があります。

野七里の先は狐川の本流、下川の水源であり、水源の近くの狭い谷あいまで水田がありました。(現在は使用されていない)周りを山に囲まれた秘境そのものといった所でも、水源から蛇行して流れてくる水を水田に引くため、山裾に穴を掘って直流にするなどの工夫もされています。

「横浜の町名平成 8 年発行」には、「この辺りを切り開いて沢山の田畑が長く続いたので、「箱根八里」にならって「野七里」と呼ぶようになった」と記されています。昭和 59 年の住居表示施行にともない、上郷町の一部から新設されました。

八軒谷(はちけんやと)

バス停八軒谷辺りの地名です。この地域に八軒しか家がなかったことからの地名でしょう。

西ケ谷(にしがや)

西が谷は上郷の西に位置する谷戸であることから西が谷の地名となりました。西が谷団地にその名を残しています。

中島(なかじま)

バス停中島や中島橋にその地名を残しています。川の中州を中島というとありますが、中州が出来るほどの川幅もないように思えます。蛇行している狐川に囲まれた台地から中島の地名が生まれたのではないでしょうか。

庄戸（しょうど） 昭和 57 年 設置

庄戸 1 丁目・2 丁目・3 丁目・4 丁目・5 丁目

昭和 57 年の住居表示施行にともない、上郷町の一部から新設された町です。庄戸の町名は地元の要望により、字名の庄戸からつけられました。（横浜の地名 平成 8 年発行より）

庄戸の「庄」の意味は様々ありますが、「かって荘園地域に見られる地域の名称」とされているのもあり、庄戸は山内庄の一部として開発された地域につけられた地名と考えられています。「戸」は門とか、出入り口をさします。

庄戸後方の尾根道は相模国と武蔵国の国境ですから、相模国から武蔵国への門か出入口として「庄戸」の地名が生まれたのではないでしょうか。

山内庄を開発した山内首藤氏は代々源氏の郎党でしたが、頼朝が石橋山に兵を挙げたとき、平家側についたため、頼朝が勝利をえると、山内庄は取り上げられ、土肥実平に、ついで和田義盛に預けられ、その後は北條家の私領になりました。

首藤氏 藤原秀郷の子孫である資清（すけきよ）が主馬首に任じられからは主馬首の**首**と藤原の**藤**をとって首藤氏を名乗ったと伝えられています。

東上郷町（ひがしかみごうちょう） 昭和 57 年 設置

昭和 57 年、新しく住居表示が実施されるに伴い、住民の要望で東上郷町になりました。上郷町の東に位置している（横浜の地名 平成 8 年発行）ことからで、青葉ヶ丘・みどりが丘・上郷台共同住宅からなります。

東上郷町の字名は大芝原です。

大芝原（おおしばはら）

芝は柴を意味し、雑木の総称とされています。原は開くの意、開墾地・未開の入会草刈地・場所など様々な説がありますが、大芝原の場合、雑木の生えている所を開墾した地から生まれた地名でしょう。大芝原は東上郷町一帯の字名で現在も北側に広い畑が残されています。

瀬上・瀬上谷（せがみ・せがみやと）

瀬上の瀬の意味は石が多く水の浅い所をさしているといわれ、猿田川の上流であるところから生まれた地名といわれます。瀬上谷は瀬上の奥の谷戸を意味しています。

猿田・申田（さるた）

猿田の語源の一つとして、猿の転化にサレがあり、崩壊地形とか、脆い地形をさすという他、サラダ（新田）の転化があります。発掘から、この辺りは早くに集落が出来たと思われ、新しい田からの地名とは考えにくい所です。

上郷高校建設に伴い、発掘調査がされ、上郷猿田遺跡報告書が出されましたが、「これら住居址の全般的な特徴は構築された台地が砂状台地で住居址自体が非常に軟弱であった」と記されています。

発掘から猿田は砂状の脆い土地ということがわかり、考古学的に裏付けられました。そのような土地に開かれた田として猿田の地名がつけられたのでしょう。猿田遺跡からは縄文後期の竪穴住居址 2 軒と奈良時代の住居址 13 軒が発掘されています。

深田（ふかだ）

猿田に隣接して深田があります。この辺りの山は砂質壌土で雨が降れば土が谷に流れ込むような所に水田が造られたため、底が深く腰まで沈むようだったので深田の地名になったといわれます。

深田はこのような低地に続いて、上郷・舞岡線側に丘陵があり、昭和 61 年、発掘された深田製鉄遺跡からは、7 世紀後半から、9 世紀前半までの約 200 年にわたって製鉄操業が行われていたことが判明しています。

上郷高校下のおとだから猿田・深田・柳坪と続いています。

おとだ・うとう田

瀬上谷の入口に「おと田」という所があるのが、「うとう田」で、「宇津尾堀方」の田の意と考えられる。（北條先生）

地元の方は「おとだ」と発音されますが、風土記稿に建武 2 年（1335）「讃岐僧都行辨分」として「宇津尾掘」があり、「今**うとう**と云ふは**宇津尾**の訛転なるべし」と記されています。「宇津尾（うつお）—うとう田 ー おと田」と転化していったのではないかと思われます。

「うとう」に関しては、掘れ窪んだ所・両側が高くて切り込んだ道・谷・狭い谷などの説がありますが、長い谷の例が多いとされます。

おと田から瀬上にかけて長い谷となっていますから、語源は「長い谷」からの地名ではないかと思われます。「おとだ・うとう田」からは綺麗な水が湧き出ていたと地元の方は話されます。

柳坪（やなぎのつぼ）

深田に隣接して柳坪の地名が残されています。新編相模国風土記稿上之村の条、小名に「柳坪」として記載されている他、「建武 2 年（1335）3 月相模国山内本郷新阿弥陀堂供僧以下料田坪付事、讃岐僧都行辨分、

田 5 段柳坪」として記載されています。
これは新阿弥陀堂の僧侶、行辨の所領として田 5 段を柳坪に持っているということです。大化の改新によって行われた班田収授法(土地の分配法)によって与えられた口分田につけられた地名が「柳坪」で、条里制の名残といえましょう。
柳坪辺りは班田収授法による口分田とするには、狭く思えますが、「田令第 9」に、「其の地に寛狭(かんきょう)有らば郷土の法に従れ」と記されていますから、狭い土地はそれにあわせた口分田が造られたものと考えられます。口分田に目印として柳の木が植えられていたのが柳坪の地名として残されているのではないでしょうか。うとう田・猿田・深田・柳坪・桜井・梅沢・杜木・後田・矢澤などは早くから開けていたことが證菩提寺文書によって判明しています。

石原(いしはら)

本郷車庫から上郷・舞岡線の途中辺りまでの左右の地名が石原です。
古くは瀬上から猿田・深田と流れていた猿田川(小名猿田を流れることから川名になった)ですが、大雨が降ると上流の瀬上から大きな石を運んできたと考えられています。その石が残されていた所が石原の地名となり、石を取りのぞいた跡を猿田川が運んできた肥沃な土砂を耕地にしたので、上郷の二大耕地の一つといわれるほどの耕地となりました。

尾月(尾付　おづき)　昭和 58 年　設置

昭和 58 年、上郷町の一部から新設され、字名の尾月が町名となりました。(横浜の地名　平成 8 年発行より)
尾月の「尾」は「山裾の末端をいう」とあり、「付」は「二つのものがぴたり一つになった地形をいうか」という説や、「ケヤキの古称はツキ(槻)で、その植生(しょくせい)によるものか」ともいわれます。今の尾月の地形を見ると、山裾の末端であり、今もケヤキの大木が植えられていますから、木に因む地名でしょうか。

犬山町(いのやまちょう)　昭和 58 年　設置

昭和 58 年の住居表示施行にともない、上郷町の一部から新設されました。(横浜の町名　平成 8 年発行より)
「昔は矢沢山に続く小さな山で、矢沢山から猪を追ったらしい。「猪の山」が「犬の山」に変わったという。(横浜の町名　平成 8 年発行)
皇国地誌に網張山が記載されていますが、この山は犬山町にあり、網を張って獲物(猪など)を捕えたから「いの山」という説も聞きます。
公田町の奥には江戸時代の「イノシシの落し穴」が仕掛けられていました。
「犬」で、「低い・小さい・狭い」を意味し、「低い山とか、小さい山」となります。矢沢山に続く小さな山としての地名とも考えられます。

いの山

昭和の初めに出された地番反別入圖を見ますと、同じ字界の中に犬山に隣接して「いの山」の地名が書かれています。
猿田の地名が記されている字界の中に申田と記され、同じ意味の地名とされています。
ということは「いの山」も「犬山」も同じ意味の地名が記されているのではないかと思います。何らかの理由があって「いの山」と呼ばれていたのが、「犬山」と呼ばれるようになったのでしょうか。

矢沢(やざわ)

矢沢は桂山公園辺りの地名です。矢沢は鎌倉の後背地ということもあって、矢は矢に使用する竹の生えている沢という意味も考えられますが、矢沢・羽沢・矢馳などの地名は地形地名であり、古文書の中には矢沢を谷沢として記されている例もあります。「證菩提寺文書、・・・四至、東限坂中并小槻峯、南限**谷澤**木戸口・・・」と記されています。
「矢」は川や湿地を示す言葉です。沢は草木の生えた湿地をいうとあります。矢沢には矢沢掘(皇国地誌　稲荷橋からその先、ほぼ道に沿ってある堀)もあり、桂山公園辺りは水の湧く沢もあったといわれますから、矢沢堀が流れ、湧き水もある所としての地名でしょうか。

亀井町(かめいちょう)　昭和 59 年　設置

昭和 59 年、上郷町の一部から新設され、字名の亀井を町名にしました。(横浜の地名　平成 8 年発行より)
證菩提寺の寺域内に「亀井戸」と伝えられる井戸があり、綺麗な水が出たので、この井戸を「神井・亀井」として、その地域を亀井と呼ぶようになったと考えられています。他に、中野町から亀井の方を見ると亀の形に見えたことから生まれた地名ともいわれます。

上之町(かみのちょう)　昭和 58 年　設置

昭和 58 年、住居表示施行にともない上郷町の一部から新設されました。(横浜の町名　平成 8 年発行より)
新編相模国風土記稿上之村の条に「此地は郷中の東、上の方にあるを以って今の村名を追いせしと云」と記載され、上之の村名は本郷の中でも

上(かみ)の方にあるので上之と呼ぶようになったと記されています。本来なれば、上郷町が上之町だったはずですが、上述したような事情で上郷町となり、その村名だった上之を町名にした上之町が誕生しました。
上之が上野の文字を使用するようになったのは明治になってからといわれますが、その前から一部では上野になっていたようです。

六反町(ろくたんまち)

六反町は押切橋辺りからバス停中野辺りの字名ですが、上郷の二大耕地の一つで、最初開かれた水田の広さから生まれた地名といわれ、今は六反町公園にその名を残しています。六反は約 60 アール

辺淵(へいぶち)

證菩提寺から旧河川(稲荷川)と山側の間に山際にそって稲荷上橋へ出る道がありますが、その山裾が塀のように思われる所を辺淵と呼んでいます。(中台の下、山裾となります)
證菩提寺文書に「證菩提寺殺生事、四至、東限坂中并小槻峯、南限谷沢木戸口、西限**邊淵橋**、北限竹後大道・・・」と、證菩提寺の寺域を示していますが、その中の邊淵橋(現稲荷橋)の邊淵が地名となっています。邊(辺)の語源は、はずれ、ほとり、縁などがあり、淵は川べり、段丘の縁などがあります。地形から考えると川の縁から生まれた地名でしょうか。
證菩提寺に関係しているとしたら、「へんぶち 塀淵」とも考えられ、證菩提寺に関連した塀があった所かも知れません。他に、山裾そのものの地形を塀に見立てての地名とも考えられます。

中台(なかだい)

證菩提寺から旧河川(稲荷川)と山側の間に山際にそって稲荷上橋へ出る道がありますが、その山際の上が中台です。亀井町の台地の中央にあるという意味からと考えられます。

稲荷(いなり)

稲荷は本郷小学校後方から富士見団地辺りの地名ですが、農業の神、稲作の神、稲荷信仰を地名としています。
しかしながら、現在屋敷稲荷はあっても、稲荷信仰を物語る大きな社などはなく、稲荷信仰が他の地域より盛んだったのが地名とされたのか、それとも最初に稲荷信仰が入ってきた地域なのか疑問の残るところです。
バス停に稲荷森があり、證菩提寺へ行く道の入口に稲荷社が祀られていますが、この社はかってこの辺りに住んでおられた方の屋敷稲荷ですから、直接の関係はありません。

バス停の稲荷森については、證菩提寺の寺域に稲荷社が祀られていたのではないかと考えられています。(北條先生)

阿ふな・虻名(あふな)

山手学院下の押切橋の次の「虻橋」先、川にそった低地から虻名公園のある高台にかけての一帯の地名が「阿ふな」です。「阿ふな」の語源として、「あふ」については、浸食作用の加わった地形、崖の崩れた崩壊地形、崖地などの他、水はけの悪い土地、洞窟説などがあり、「アブミ(足踏み)」の約化で、崖地で前に進めないなどが有ります。
「な」については、場所を示す土地をいうなどがあります。元の地形から考えると、崖の崩れた崩壊地形のあった場所だったのかも知れません。
ここには、7 世紀を中心に造られた横穴古墳が 14 基ありました。

西行坂(さいぎょうさか)

西行が東大寺大仏殿修復の為の勧進に赴く途中、鎌倉で頼朝に会い、その後、奥州へ急いでいます。開発前は證菩提寺の後方から寺の横につながる坂があったといわれ、西行坂と呼ばれていました。
現在も證菩提寺横の石段を上がる坂を西行坂と呼んでいます。西行が通ったか、どうか判然としませんが、鎌倉から奥州へ行くには栄区を通ると考えられますから、その可能性はあったと思います。

坂中(ばんちゅう)

山手学院入口から押切橋を渡り、右の坂道を上った台地にかつては光明寺の支院だった坂中山観音堂があり、鎌倉郡三十三観音の第十七番札所でした。(現在は住宅)
風土記稿上之村小名に、「村内證菩提寺藏、建久 8 年(1197)の文書に東限**坂中**并小槻峯、南限谷澤木戸口と見えしは、巳上三所を云るなり」とあり、これは證菩提寺の寺域を示していますが、この坂中山観音堂の坂中が地名になっているものと思われます。

森の木・杜木(もりのき)

光明寺の南隣りが「杜木」です。「昔の上野の想い出」の中に「子供の頃の思い出」(大正時代)の略図を見ますと、「森之木大欅」と記されています。
森の語源として土地の小高い所、丘、円錐形の山谷、神の祀ってある森、神社、人の入ってはならない林、もぎ取られたような地形などがありますが、森の木の地形を見るに、4号線より低く川にそった所で、高く盛り上がった

所などは当てはまらず、「森の木之大欅」と呼ばれるような大木があり、それが地名になっているか、又は神の祀ってある森ではなかったかと思われます。

南河内（みなみこうち）

バス停に南河内がありますが、河内の語源に低い地で田のある所、川の内、川に沿って開けた所、耕地として新開墾地などがあります。

近くに上耕地があるところから、南にある耕地をさすのかとも考えられますが、南河内を挟むように上川、下川が流れているのと，河内の文字から、川の内としての地名ではないでしょうか。

高塀（たかへい）

柏陽高校後方辺りの地名が高塀（たかべい）です。風土記稿に「證菩提寺総門の廃蹟なりと云ふ」とあり、高塀には證菩提寺の総門があったと伝えています。寺の高い塀があったとして、それが地名になっているのではないかと思いますが、距離的に離れすぎているのではないでしょうか。

梅沢（うめざわ）

庄戸郵便局前の坂道から白山神社にかけての高台一帯の地名が梅沢です。光明寺の山号が梅沢山となっていますが、地元の方のお話では梅沢谷戸には梅の木が沢山あったので「梅沢」というといわれます。

語源用語では、梅は（埋め）で砂などが堆積した地とか、埋立地、植物の梅などがあげられています。梅沢では関東大震災で大きな山崩れがあったといわれますから、過去において山崩れがあり、埋まった沢の意味かも知れません。建武 2 年（1335）の證菩提寺新阿弥陀堂料田に梅沢の地名が見えています。

鍛冶ヶ谷口（かじがやくち）

風土記稿に「此地鍛冶ヶ谷村に邊す故に此名ありと云ふ」とあり、鍛冶ヶ谷への入口の意味でしょう。建武 2 年（1335）の證菩提寺新阿弥陀堂料田に鍛冶ヶ谷口の地名が見えています。

山王台（さんのうだい）

日枝神社が祀られている台地（上郷中学校後方）の地名です。日枝神社の別称が山王ですからそれが地名になっているのでしょう。

後田（宇之呂陀　うしろだ）

鎌倉街道に面した関輪業後方辺りから和田医院辺りにかけてが後田です。後田の語源に神社や寺の後方に有力者が持っている田をいうとありま

す。近くに田所や竹内の地名があり、その関連も考えられます。

建武 2 年（1335）の證菩提寺新阿弥陀堂料田に後田の地名が見えています。

田所（たどころ）

田所は現在の公田交差点辺りの地名で、建武 2 年の料田坪付に「太夫法印昭辨分屋敷本郷田所」とあります。田所の語源として「田地」、「豪族・貴族の農園」、「古代から中世にかけて国衙領や荘園を現地で支配していた領主の所領地」とあります。語源から考えるとあの辺りに豪族の農園があったのでしょうか。

竹ノ内（たけのうち）

公田交差点近くに「竹の内」の地名があり、風土記稿に、「太夫法印昭辨分、屋敷本郷田所讃岐房蹟、（竹内）田二町、（一町鍛冶ヶ谷、四段白山堂、二段桂口、四段杜木）」として記載されています。

竹の内は東國で多く見かける地名ですが、竹の内は館ノ内の転化とされ、居館の周囲にしばしば竹林があったことに由来するともいわれます。竹ノ内の語源に、盆地、窪地、家の周りに竹を植えて要害とした、竹に囲まれた所、小名などの中には、豪族屋敷跡を示すと見られる地名もある、などです。他に、竹・多気には崩れやすい山や台地もあるので、語源については慎重な検討が必要なようです。

竹ノ内が僧侶の領地としたなら、竹に囲まれた所となるでしょうか。近くに田所があるので豪族屋敷跡を示しての「竹の内」でしょうか。

公田交差点周辺の地名を見ていると、田所・竹の内・後田の地名は建武の新政の頃（1334～35）には見られている古い地名です。田所は田荘とも書き、大化の改新以前から発達した貴族・豪族の農園で、奈良時代になっても荘園の先駆形態として存続していたようです。

奈良時代、この辺りは鎌倉郡尺度郷に属していたと考えられていますから、田所の地名はその頃からあったのではとないかと思われます。その語源から貴族か豪族の農園があり、竹の内の地名からその屋敷があったとも考えられます。後田の地名からは、有力者が持っている田があり、その周辺の上耕地・中耕地・内耕地の地名から狛川流域の肥沃な土地を背景に、貴族か豪族が居住していたのではと推測されるのですが。

桜井（さくらい）

桜井は桜井小学校から桜井橋辺りの地名ですが、風土記稿に建武２年(1335)「三位律師實脩分、屋敷本郷桜井」とあります。「さくら」を「狭倉」として、低い崖地のある所や、丘陵地など、崩壊地形、浸食地形を示す地名になるとあります。地形から考えますと、低い崖地のある所としての地名ではないかと思います。造成に伴い、崖面下から五輪塔や石仏が出土しています。

宮の谷（みやのやと）

宮の谷は證菩提寺の寺域内、収蔵庫の後方辺りの地名です。風土記稿の證菩提寺の条に八幡宮とあり、上郷に八幡宮の記録が他にないようなので、この宮の谷に八幡宮が祀られていたのではないかと思われます。

頼朝は鎌倉に幕府を開くと八幡宮を建立しています。頼朝が創建した證菩提寺にも八幡宮が祀られていたのではないかと思います。地名語源に「ミ(御)・ヤ(屋)。神のいる所、神社があり重なります。

山王台堂畑・殿畑（さんのうだい・どうはた）

桂台フローラの北の端辺りの地名ですが、證菩提寺が荒廃した後、小菅ヶ谷殿が創建した新阿弥陀堂があったといわれる跡地です。「堂」で仏堂のあった所、ハタケは畑のある所としてお堂のある所の畑の意味となります。

子の神前（ねのかみまえ）

現在は中野町に、「子の神日枝神社」として祀られていますが、「子の神」の初見は古く、建武２年(1335)の證菩提寺文書に、「二段子神前」とあります。その当時、子神が祀られていた所が分かりませんが、その近くに「子の神前」の地名があったのでしょう。社伝によれば中野に「子の神日枝神社」として祀られたのは文明年間(1469－86)といわれます。

押切（おしきり）

バス停山手学院入口から学院に向かうと、独川(上川)が流れ、そこに架けられている橋が「押切橋」です。大雨が降ると山手学院のある高台や、観音谷から流れてくる大水で押切橋辺りが切られ、ひどい時は下を流れる独川(下川)と合流するほどでした。大雨で押し切られるところから押切の地名がつけられたのでしょう。

宇津尾堀（大堀方）（うつおぼり・おおぼりかた）

風土記稿證菩提寺に「相模国山内本郷、新阿弥陀堂供僧以下料田坪付事、讃岐僧都行辨分、屋敷本郷**宇津尾堀**、(**大堀方**)田二町」と記

されています。

これについて、宇津尾堀方は現アスレチック(川間)の西隣の地で、ここを「東(ヒガシ)」という。押切橋辺りの地名を「中居」と云い、この西方を「西(ニシ)」という。この西に隣接するのが「大堀方桜井」であり、押切橋の北「坂中山観音堂」に入る谷をガンジヤト(観音堂谷)といい、ここを中心として東西に分かれた大堀川ぞいの地名は新阿弥陀堂供僧の屋敷によって名づけられたと考えられる。(北條先生)

馬場（ばば）

富士スーパー辺りの地名が馬場です。馬場は中世武士が乗馬の訓練などを行った所とされ、一定の領域支配の中心となっていた平城跡や、城跡に集中する傾向が強いとされています。その他、馬の調練所、競馬場などがありますが、栄区の場合は鎌倉の後方地として、武士の乗馬の訓練、もしくは、馬の調練所があったのではないかと考えられます。

番匠面（ばんじょうめん）

元大橋２丁目の高台辺りの地名ですが、番匠面の地名は各地に多く見られます。古代、交代で都に上がり、木工寮で労務に付いた大工、木工をいいましたが、後には、寺社に属した大工や鍛冶職が住んでいた所を称しました。元大橋の番匠面は證菩提寺に属した大工や鍛冶職が住んでいた所としての地名ではなかったのかということが推測されます。

面は免であって租税を免ぜられたという意味です。

風土記稿に「**地蔵堂・薬師堂・経堂・ぢんがん堂・新福寺**以上五所皆仏宇(ぶつう)の蹟なりと伝ふ」と記されています。現在の證菩提寺の本堂のある所は**地蔵堂跡**と伝えられています。**新福寺**はガソリンスタンド辺り(信号上郷)に、**ぢんがん堂**はバス停本郷辺り(今井工務店内)にあったと伝えられています。千載橋の左下に**経堂橋**(皇国地誌記載)があり、かつて近くに経堂があったのではないかと推測されています。又、その先の旧道にそって**薬師堂**がありますが、風土記記載の薬師堂か、どうか。?

房中　證菩提寺坊中の跡といふ。**中房**　是も坊蹟なるべし、と記されています。これは證菩提寺の寺域内にあった坊の跡です。

柳坪　竹内　鍛冶ヶ谷口　森ノ木　桜井　梅沢　後田　「已上七所は證菩提寺藏、建武二年(1335)、新阿弥陀等供僧以下、料田坪付の書中

に見えたるのも是なり」と記され、これらの地名は約 670 年前からの古い地名です。

上郷に地名が多く残されているのは、證菩提寺に関連した地名が風土記稿に記載されているからと思われ、現在は他の地域になっている地名も入っています。

若竹町（わかたけちょう） 昭和 48 年 設置

昭和 48 年、住居表示の施行に伴い、中野町・上郷町の一部より新設された町（横浜の町名） 町名は新しい住民が多く、旧来の町名にかかわらず、若く竹のようにすくすくと此の地に育って欲しいという地元の意見により決定されました。

元大橋（もとおおはし）1 丁目・2 丁目 昭和 48 年 設置

昭和 48 年、住居表示の施行に伴い、鍛冶ヶ谷町・中野町・上郷町の一部より新設された町（横浜の町名）。

町名は字名の大橋谷戸から付けられましたが、南区に大橋町があるため、元大橋としました。

中野町（なかのちょう） 昭和 14 年 設置

> 狛川の中流、本郷の中央に位置し古くは上流域の上之に対して中之村といわれた。 本郷郷土史研究会

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

志比禮（しびれ）・和田（わだ）・井戸久保（いどくぼ）・大橋谷（おおはしやと）・宮の台（みやのだい）・南台（みなみだい）・南河内（みなみこうち）・稲荷（いなり）・虻名（あぶな）・子神前（ねのかみまえ）・井戸尻（いどじり）

稲荷（いなり）・虻名（あぶな）・南河内（みなみこうち）は上郷町で記載済）

中野町

中野の地名について、上記のように刻まれた石碑が本郷郷土史研究会によって立てられています。この石碑は中野町だけでなく、上郷・鍛冶ヶ谷・小菅ヶ谷・桂・公田・笠間町の要所に立てられています。

「村名の中野は郷中の中央であり、古くは中之村あるいは中ノ村といったが、いつの間にか中野村と改められた「（皇国地誌）横浜市報」という。

この村より上手の村が上之村（現在の上郷町）であるというのである。

狛川沿いの谷戸内の村を入口に近い方から中、上と名づけたのであろう」。（横浜の地名 昭和 57 年）

志比禮（しびれ）

公社柏陽団地辺りが志比禮（しびれ）です。「しび・れ」として「しび」は、湿地を示すか、ヒビの転化したものかなどがあげられています。「れ」は接尾語か、場所を示すかになり、湿地のある場所か、輝（ひび）のある場所の他、「シバウレ」の転化で柴木の多い裏山という考えもあります。

建武 2 年（1335）讃岐僧都行弁分田二町のうち「六段志比禮」として記載されています。

和田（わだ）

紅葉橋横から上郷市民の森に入る道がありますが、その入口に架けられている橋が和田橋です。この和田橋から紅葉橋にかけての地が和田です。和田の語源に屈曲、湾曲した所、山の谷間、谷間に比してやや広い平野、入江、入海などがあります。

和田辺りで狛川が湾曲していますから、湾曲している所としての地名ではないかと考えます。

井戸尻（いどじり）

中野町左近公園の東、日東橋から富士見団地へ上がる道があり、途中左に雑木林がある辺りから、その先、長く耕地が続いていたといわれ、井戸尻はその辺りの地名といわれます。井（井）・ド（処）は泉や流水から水を汲み取る所、谷川から水を引いた貯水槽など。

ド（処）は、沢の合流点、谷間の狭くなった所、場所を示す接尾語などがあります。尻に、シリ、後方、背後、末端、出口、裾などがあります。

井戸久保（いどくぼ）

上郷町のみやこ寿司辺りの地名が井戸久保です。中野の地名として出ていますから、飛地があったのかも知れません。井戸の意味は「井戸尻」の「井戸」と同じです。久保は一般に周囲より低く窪んだ所、谷間、などの意味となります。

大橋谷（おおはしやと）

バス停元大橋近くを流れる狛川に架かる大橋辺りからその奥一帯が大橋谷です。横浜開港に伴って、中野から元大橋を通る横浜道が造られ、狛川と交差する所に架けられた橋が大橋です。皇国地誌に「大橋 本村中央ナル字大橋ト六反町ノ界ナル前橋ノ下流ニ架シ鎌倉横浜間ノ往還ヲ通ズ・・・・」と記されていますが、大橋という橋名しては小さな橋です。

橋には端の意味もあり、大橋谷は大きな谷戸の端としての地名ではないで

しょうか。

宮の台（みやのだい）

宮の台はお宮のある台とされており、中野では日枝神社が祀られている台地となります。

桂台東（かつらだいひがし） 平成 10 年 設置

平成 10 年、住宅表示施行にともない、上郷町の一部から新設した町です。

桂台西（かつらだいにし） 1 丁目 平成 10 年 設置

平成 10 年、上郷町、公田町、中野町の各一部から新設された町です。

桂台西（かつらだいにし） 2 丁目 平成 10 年 設置

平成 10 年、公田町一部から新設された町です。

桂台南（かつらだいみなみ） 1 丁目 2 丁目 平成 10 年 設置

平成 10 年、上郷町、公田町の各一部から新設された町です。

桂台北（かつらだいきた） 平成 10 年 設置

平成 10 年、上郷町、公田町、中野町の各一部から新設された町です。

桂台中（かつらだいなか） 平成 10 年 設置

平成 10 年、上郷町、公田町の各一部から新設された町です。

桂台の地名

平成 10 年の住居表示を前に、町名について、様々な地名が出されましたが、低地に桂町があるところから、その上の台地に広がる町の名を桂台とすることを、住民の要望で決定しました。

他に、緑区に桂台があり、「この地域は比較的小高いなだらかな地形の台地であって眺望にすぐれ、又、自然にも恵まれており、四季の味わい深い土地である」ことと、「古来月の意味を表し美しいもの、立派なものを表現する場合の形容に使われた木」として桂台と名づけられた」として記載されています。（横浜の町名 昭和 57 年発行より）

地形から桂台の地名まで栄区の桂台と相似しています。

柏陽（はくよう） 平成7年 設置

平成 7 年、住居表示施行により、中野町、鍛冶ヶ谷町、桂町、上郷町、公田町、小菅ヶ谷町の各一部より新設されました。、

「町名は地元で親しまれている「柏陽」から採った。これは町内にある高校の校名として、神奈川県知事内山岩太郎が命名したもので、この地が「柏尾川の流れに近く、富士山に続く丘陵を背にして、日あたりがよく、前面が開けて、野の趣を残している。陽には太陽の輝き、隆昌の気がこもっている。学園建設地として恵まれた環境を考えあわせて柏尾川の「柏」と太陽の「陽」を結んで、最終的に命名されたという」。（横浜の町名平成 8 年）

小菅ヶ谷町（こすがやちょう） 昭和 14 年 設置

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

赤坂・飛石・渡戸・木曽・滝ノ分・新宿・中坪・大坪・和田・石神・宮ノ下・猶川・大面・仲ノ谷・山戸谷・砂取場・水喰戸・鳥井戸・的場・庚申塚・山谷・殿谷・殿ケ谷・丸山・清水・堤ケ谷・相原・下ノ谷・大清水・南原・猪ノ鼻・青楼ケ橋・木曽ノ谷・木曽ノ前・寺ノ前・みこの坂・西谷・廣地つのが谷・地蔵の前・宿山・宿ノ谷・追上・花立・亀井・かくしが谷・小山・七石山・うとう坂・不帰橋・大道・御三の前 霧が久保

小菅ヶ谷町

「比較的小さい谷」を意味する地名用語に「スゴー」があるといい、あるいは「スゴヤ」が「スガヤ」になったものか。「小」は「小さい」というより、地名によく見られる接頭語であろう。また、「スカ・ヤ」の可能性もあり、その場合は「砂洲のある谷」ほどの意味がある。（横浜の町名）と記されています。

他に、「菅の生えている所」というのもあり、小さい谷を意味するのか、菅の生えている所か、定かではありません。

「風土記稿」は、北條泰時の女を小菅ヶ谷殿と呼び、この村はその粧田などあって居住していため村名となったというが、「横浜市報」がいうように、地名が先で人名があとと考えるべきであろう。（横浜の町名昭和 57 年）

ところが、平成 8 年の「横浜の町名」では、「鎌倉幕府の三代執権北條泰時の女（むすめ）を小菅ヶ谷殿といい、この村はその粧田などあって、ここに居住したので村名になったという。（横浜の町名平成 8 年発行）

小菅ヶ谷の由来について、同じ、「横浜の町名」にしても、昭和 57 年には「地名が先で人名があとと考えられるべきで゛あろう」としていますが、平成 8 年のは、「人名が村名になったという」としています。

小菅ヶ谷 1 丁目

平成 6 年、住宅表示にともない、笠間町、桂町、公田町、小菅ヶ谷町、中野町の各一部から新設した町です。

小菅ヶ谷 2 丁目

平成 6 年、住宅表示にともない、飯島町、小菅ヶ谷町の各一部から新設した町です。

小菅ヶ谷 3 丁目

平成 7 年、住宅表示にともない、鍛冶ヶ谷町、小菅ヶ谷町の各一部から新設した町です。

小菅ヶ谷 4 丁目

平成 8 年、住宅表示にともない、小菅ヶ谷町、小山台 1 丁目の各一部から新設した町です。

小山台(こやまだい)1 丁目 2 丁目

平成 6 年、住居表示施行にともない、小菅ヶ谷町の一部から新設された町です。町名は地元の要望により字名から採られました。

赤坂(あかさか)

小名の赤坂は小菅ヶ谷でも北の方で、高台に「赤坂公園」があり、地名を残しています。赤については、赤い色、土壌の色に由来するか、何かの露出した状態などがあり、「坂」については、傾斜して勾配のある所、山の峠などがあります。これらから考えると「赤土の坂」の意味になるのかも知れません。

「赤坂公園」下の崖面から、かっては水がしたたり、赤坂川の源流となっていました。赤坂川は長光寺前から、西本郷小学校前を流れ、狛川に合流していましたが、源流は開発で埋められ、川は暗渠になっています。

飛石(とびいし)

信号に飛石とありますが、その東の山一帯の地名が飛石です。皇国地誌に、「山上ニ奇石アリ、飛石ト云フ里俗相伝ヘテ往古上総ヨリ飛来リシモノトシ恐レテ敢テ手ヲ触レルモノナシ終ニ以テ地名トナスト云フ」と記され、上総(千葉県)から石が飛んできたのが「飛石」の地名の起こりと記しています。山の持ち主のお話ですと、その石は尾根道の大きな木の横にあったが今は埋もれてしまったとの事です。近く公園になるようですから、整備される際、見つかれば隕石か、火山弾か、石の正体が分かるでしょう。

渡戸(わたりど・わたど)

本郷台駅東側の道路に信号「渡戸」がありますが、地形を見ますと、小菅ヶ谷のほぼ中央、東も西も高台ですから、谷間の平地だったのでしょう。「渡」は屈曲、湾曲した所、渡渉点、渡船場とあり、「戸」は出入口、谷間の狭くなった所などがあります。赤坂川が流れていても船で渡るほどの川幅ではありません。信号のある道路にそって東側に旧道が残されていますが、「渡戸」の所で西に曲がっています。その曲がった道か、曲がっている土地につけられた地名か、それとも、谷間が曲がって狭くなった所でしょうか。

木曾(きそ)

小菅ヶ谷小学校付近一帯の地名、(現本郷台 4 丁目辺り)「木曾」は、崖、傾斜地、削り落とされた地、険阻な地などを意味しているようです。

木曾の御岳さんのような険阻な地だったのでしょうか。風土記稿に「木曾ノ谷、**木曾分の地**永禄中は玉縄城主、北條左衛門太夫殿綱成の知行なり、役帳曰、玉縄衆地行役左衛門太夫殿弐百五十貫文、東郡本郷木曾分卅四貫九百六十文・・・」と記載され、木曾の地は北條綱成の知行地であったことを記しています。

滝の分(たきのぶん・たきのわけ)

これも長光寺前の信号に「滝の分」とあり、「たきのわけ」とローマ字で記されています。「滝の分」は長光寺から本郷台小学校にかけての地名です。

長光寺の角を曲がった先の山側からかつて滝が流れていましたが、関東大震災で流れが止まったといわれます。滝の前には「清滝不動庚申塔」が祀られていましたが、現在は春日神社境内龍光院跡地に移されています。滝跡近くの本郷台小学校に隣接して「滝の前公園」があります。

「滝の分」と書いて、「滝のぶん」とし、「木曾分の地」と同じように、知行地とされる説もありますが、そうだとしたら、風土記稿に、「木曾分の地」同様「何某の地」と記されるのではないでしょうか。

長光寺の反対側の「ふじスーパー」の後方にも、かつては滝が流れていました。近くにはこれも「瀧之前公園」があります。「分」は分割とか、分けるの意味となりますから、滝が分かれてあるという意味の地名ではないでしょうか。

新宿(にいじゅく・しんじゅく)

根岸線大道トンネルから本郷スポーツプラザ辺りの地名が新宿で、ガードをくぐった先のマンションに「ドミール新宿」と地名が記されています。

仁治元年(1240)北條泰時が造った山内道路が出来ると、小菅ヶ谷でも

西の方の大誓寺辺りの宿の谷に対して、新しく出来た道路に近い東の方に新しく宿が出来、新宿の地名が生まれたとされています。横浜市小名一覧では「しんじゅく」としています。

大坪（おおつぼ）

新橋（にいばし）から西本郷小学校にかけての一帯の地名が「大坪」です。奈良時代の班田受授法（土地の分配法）による口分田に付けられた地名と考えられています。

中坪（なかのつぼ）

大坪の東隣り、独川にそった土地で、大坪も中坪も独川流域の肥沃な土地だったのではないかと思われます。中坪も大坪同様な意味での地名と思われます。遊水地に中の坪と、中坪公園に地名を残しています。

独川（いたちかわ）

中坪の東隣で栄第一下水処理場辺りから本郷台駅前一帯の地名です。独川の川名が地名になっています。風土記稿に「独川南界を流る、幅四五間、兼好法師が折句の詠歌ありし旧蹟と伝ふ。兼好家集曰、相模国いたち河と云ふ所にて、此所の名を句の上にすえ旅の心を、

いかにわが　**た**ちにし日より　**ち**りのきて　**鳳**だに闔を　**は**らはざるらん」と詠んでいます。

又、「吾妻鏡」の元仁元年（1224）には、炎天が続くので雨が降るようにと祈る「七瀬の御祓い」が行われた七瀬の一箇所に独川も記載され、鎌倉の外周の守りとして、宗教的にも重要な川だったと思われます。

その他、「鎌倉年中行事」に「公方様御発向、鎌倉御立あり、独川にて御休あり、御酒三献、御湯漬参る」とあり、公方様が武蔵国に発向するときはこの川辺で昼食をとるのが例とされていたようで、それにより独川の別名として出立川と呼ばれるようになったといわれます。その他、鎌倉に幕府が出来ると独川を通って出立する人が多くなり、出立川と呼ばれるようになったのではないかと思います。

石神（いしがみ）

独川の東隣から大誓寺一帯の地名が「石神」です。語源に石神信仰によるものかとあり、石を神の依代とする所や石そのものを神とする例があり、関東・東海に多いようです。

和田（わだ）

本郷台駅東側から西側一帯の地名が和田です。屈曲、湾曲した所、山の谷間、谷間に比してやや広い平野、入江、入海などがあげられています。古代、大船入江が奥深く侵入し、この辺りでは平戸辺りまで海水が入りこんでいたようです。和田とは、「わだつみ」の和田という説もあります。

本郷台駅後方西側から東側にかけて丘陵が続き、その谷間に水田があったようですから、谷間に比してやや広い平野だったのかも知れません。

宮下（みやのした）

春日神社一帯の地名です。地名の「宮の下」は小菅ヶ谷の鎮守、春日神社の下の土地を意味しているものと考えられます。

小山（こやま）

字名の小山は町名にも採られていますが、小山台小・中学校から小菅ヶ谷幼稚園にかけての地名です。現在でも小山台小、中学校は高台にあり、小高い山を意味した地名と思われます。

宿山（しゅくやま）

風土記稿に「石室　村南字宿山にあり、土俗太子矢倉と唱ふ・・・」と記され、「村南」ということから、宿山は城山を指しているのではないかといわれます。（北條先生）城山は関東財務局南小菅ヶ谷住宅から市営小菅ヶ谷住宅辺りまで長く延びた山でしたが、戦時中、海軍燃料廠を造成する際、田を埋めるため崩され、今は城山橋にその名を残しています。

城山の前を鎌倉道が通っていましたから、宿があったのではないかと考えられています。語源にも宿場・集落が記されています。

宿の谷（しゅくのやと）

大誓寺辺りの地名です。大誓寺前を鎌倉道下の道の別の道が通っており、その先、野庭から永谷へ出て、餅井坂に通じていました。これも古い時代に宿があったのではないかといわれます。

亀井（かめい）

皇国地誌に「亀井堀東方小名亀井ニ起リ本村東南部ヲ南流シテ沿傍田土ノ悪水ヲ瀉下シ南ニ抵リテ七石堀ニ注グ・・・」と記されています。

小名亀井は小菅ヶ谷　2705　メゾント田村辺りです。亀井堀は小菅ヶ谷地域ケアセンター内を流れ、根岸線からは暗渠になっていますが、かっての亀井堀の名残です。亀井の田の中に堀があったといわれます。

亀は神・上の転、亀から長寿にちなんだ地名、井は泉や流水から水を汲み取る所、掘り井戸などがありますから、田の中に堀があったとしての地名でしょう。

西谷（にしやと）

渡戸の西、西谷稲荷社が祀られています。小菅ヶ谷でも西の方にある谷戸としての地名と思われます。

猪鼻（いのはな）

猪鼻の地名は小菅ヶ谷の他、上郷にもありますが、場所が不明です。

語源は猪の鼻のように細く突き出た所の意味と考えられます。風土記稿證菩提寺に「建武二年（1335）下部鏡法分三段猪鼻」（供僧の下部鏡法の料田として猪鼻に三段ある）として記されています。

青楼ケ橋（せいろうがはし）

風土記稿小菅ヶ谷村に「小名宿山の辺を、武家の居跡と伝え、其西を御三ノ前、艮方に高塀、青楼ケ橋などの唱へ、今猶残れり、・・・」と記され北條泰時の娘、小菅ヶ谷殿の居蹟とされています。

艮（うしとら）は北東を指しますが、宿山とされる本郷台駅前の関東財務局南小菅ヶ谷住宅の北東となりますと、地球プラザ辺りに青楼ケ橋があったかと思いますが、立証するものがありません。これも建武二年（1335）「道円跡分、田一段青楼ケ橋」として記載されています。

木曾の前（きそのまえ）

先に記した**木曾**の項参照して下さい。その木曾の前の地をいうものと思われます。

木曾の谷（きそのやと）

先に記した**木曾**の項参照して下さい。語源に、「谷」という認識は南関東に多く見られる台地の樹枝状谷が即ち湿地であるため派生したもとされています。であるとしたら、木曾の谷も樹の枝のようにある谷から生まれた地名でしょうか。

広地（こうち）

広地稲荷が祀られている辺りの地名。耕地、河内、神地などありますが、文字通りとしたら、広い地となりますが、新しく開墾した土地とも考えられます。

花立（はなたて）

小菅ヶ谷小学校の辺り、下倉田との境の地名。従って下倉田にも花立の地名があります。鷹狩りに訪れた家康が鷹に逃げられたので、傍らの薬師如来に野の花を供えたところ、鷹が戻って来たという花立にまつわる故事が伝えられています。因みに長光寺に祀られている薬師如来は徳川家の

葵の紋が刻まれた厨子に納められ、「花立薬師」として信仰されています。長光寺文書に「御花立ノ御因縁ニ依テ地銘ヲ改テ総テ花立ト字ス、延宝年中（1673～1680）御改メ御水帳ニモ此字アリ」と記されています。

他に、坂で馬が上を見上げたとき、鼻を立てないと見えないほどの坂からきた鼻立伝説もあります。本来、花立は境を意味し、相模国と武蔵国の境となる金沢区の鼻欠地蔵（地蔵の後方を国境が通っている）もその意味の地蔵といわれます。

追上（おいあげ）

信号「栄第一下水処理場」の四辻を西におれると、下水道局前に三叉路があり、その辺りが「追上」です。長光寺文書に「境内西ノ辺ナル坂ヲ、御通行ニテ供奉之衆中追々走リ来リ守護シ奉リ給フ故ニ西ノ坂ノ地銘ヲ追上ト改ムト云々、御水帳（検地帳）ニモ此字アリ当寺境内附ナリ」と記されています。

家康が鷹狩りに来たとき、お供の家来が後を追ってこの坂を上がって守護したことからの地名と伝えられています。

七石山（しちこくやま）

鍛冶が谷式と称され、県下でも稀といわれる特異な形式の横穴古墳が多数発掘されたことで有名でしたが、根岸線の敷設にともない、一部を残して消滅しました。現在、11基が下水道局敷地内に残されています。

七石山の語源として、七は多くの意味、石は近世の石高制による地名か、穀物、特に米の流通販売に関連するものか、などがあげられています。

近くに大坪・中の坪といった口分田に付けられた地名も残されていることから、それらの関連した地名とも考えられます。

みこの坂（神子坂）

長光寺前から春日神社前（信号宮の下）に通じている坂道が「みこの坂」です。春日神社の巫女がこの坂を通ることからとか、宿谷から西谷に越える「みこしの坂」、坂が以前は高かったので、見越せることからの「みこしの坂」説などが伝えられています。語源に、越す所、急傾斜地、崖などがあります。

うとう坂

小山谷から西谷に通じる坂道。「うとう」について、風土記稿上之村の小名に「うとう田」があり、「讃岐僧都行辨分」とされているところから、近くに「うとう田」があったのかも知れません。語源に狭く長い谷、掘れ窪んだ所、

などがあります。

新橋（にいばし・しんばし）

狛川に架かる橋で小菅ヶ谷と笠間を結ぶ橋。風土記稿小菅ヶ谷村に「鎌倉古道の係る所橋を架す、長六間新橋と唱ふ」と記されています。風土記稿に記載されている橋で今も残されているのは新橋だけです。

吾妻鏡　仁治元年（1240）に「於前武州御亭（北條泰時）可被造山内道路之由、有其沙汰、安東藤内左衛門奉行之」とあり、安東藤内を奉行に巨福呂坂から小袋谷、離山、笠間、新橋、大道、飯島、長沼、下倉田、上倉田と続く山内道路が完成すると、その道中に新しい橋として新橋や大道の名がつけられています。その他は狛川を参照して下さい。

不帰橋（かへらずばし）

大道から笠間方面に向かうと、バス停小菅ヶ谷ですが、その近くの松本鶏園辺りに以前「不帰橋」があり、皇国地誌に「未ノ方田間ニ架シ戸塚駅ヨリ鎌倉ヘノ往還ヲ通ズ・・・」と記されています。「不帰橋」は戸塚から鎌倉への道中にある田の間に架けられていた橋で、沼地のような所だったようです。この沼には大蛇がいて通る人を飲み込んだという蛇塚伝説が字大坪（小菅ヶ谷 2 丁目 33 辺り）に伝わっています。

幕末の頃の話に、田立には龍がいたといわれるが、大坪には大蛇がいて「不帰橋」を通る花嫁を度々襲い飲み込んでしまうので皆困っていたものだ。この大蛇を退治して皆を難儀から救おうと飯島の勇気のある男性が合羽を着て刀を持ち女装して大蛇を待っていたのさ。やがて大蛇が出てきて、女装しているとは知らず、これは美味しそうな娘さんと飲み込んでしまった。飲み込まれた男性は持っていた刀でお腹の中をさんざん切まくって大蛇を退治し、その死骸を山に埋めたので、その山を蛇塚山（じゃづかやま）と呼んだそうな。

大蛇を埋める前に眼をとって小笹病院に預かって貰ったが、後で見ると眼が溶けてなくなったのか、ガーゼが黄色くなっていたといわれます。蛇塚山は宅地開発で崩されてしまいましたが、現在の小菅ヶ谷町 2 丁目 31 辺りにあったと話されます。この大蛇伝説は飯島にも伝えられています。

警察学校前の橋の次の橋の名を「海里橋（かいりばし）」といいますが、「不帰橋」に対する「海里橋」ではないかという説や、出立川・帰り橋「海里橋」のセットではなかろうか。（北條先生）があります。

大道（だいどう）

バス停大道辺りの地名です。仁治元年（1240）北條泰時が安東藤内左衛門を奉行に巨福呂坂から離山・新橋・大道・倉田と続く山内道路を完成させました。この道がそれまでの中の道と下の道の道にかわる新道として鎌倉道中の道とされ、大きな道として大道の地名が残されています。

本郷台 1 丁目・本郷台 2 丁目・本郷台 3 丁目

平成元年、住居表示施行にともない飯島町・小菅ヶ谷町の各一部から新設した町です。

本郷台 4 丁目

平成元年、住居表示施行にともない飯島町・上郷町・小菅ヶ谷町の各一部より新設した町です。

本郷台 5 町目

平成元年、住居表示施行にともない小菅ヶ谷町の一部より新設した町です。

本郷は郷の中心であり、最初に開け付近の発展の基礎となった土地を指しますが、その本郷の高台にある町として本郷台と名づけられました。

鍛冶ヶ谷町（かじがやちょう）　昭和 14 年　設置

相模と武蔵の國境ぞいには金に関係した地名や呼名が残っている。
鍛冶ヶ谷は武具や農具を作った鍛冶集団の居住地と考えられる。
本郷郷土史研究会

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

南ノマエ・中居・西谷・北谷・東谷・宮之前・松木谷・東台・柏原・桜馬場
海戸・番匠谷・台・油ケ谷・中谷・矢ケ久保・下根・河内・味噌野

鍛冶ヶ谷町

「村名の起こりにつき「横浜市報」は、「口碑に伝ふる所によれば鎌倉時代武具を作る鍛冶師居住せしより村名となりしと云へども其証を得ず」とする。カジ（カヂ）のつく地名は全国に広く分布し、その中には鍛冶に因むものがあると思われる。しかしカチという地名用語は「河谷」を意味する語（地名の語源）であり、古代の地名の中にもカチ、カドのつく地名が多く、また戸塚区から近い鎌倉市梶原（旧かなづかいではカヂハラ）も鍛冶に因む地名であるとする説があるが、カチ（搗）が語源でカチ、ハラ（谷筋の土手の原）で

ある。「古代地名語源辞典」との考えもある。また、隣接の桂町、公田町内の字名に上耕地、中耕地、内耕地などがあるが、上耕地は上河内とも書かれたことがあり、カチ、カッチなどの地名が河内と書かれる例が他にもあることから注目すべきといえるのではないか。

鍛冶に因む鍛冶ヶ谷であるとしても、いわゆる「刀鍛冶」と「ケ谷」の谷とが何故結びつくのか必ずしも説得力があるとはいえず、(従来は金属の精錬がこのような河谷で行われたことをもって説明するのが常であった)「谷」を形容する語が前にくる「○○ケ谷」の方が地名の構成としては自然なようにも思える。いずれにせよ用字にとらわれず、音韻及び史料、そして他の地域の同種の地名から一層の考察が必要であろう」(横浜の町名　昭和 57 年発行)

「鎌倉時代に武具を作る鍛冶師が居住していたことから「鍛冶ヶ谷」と呼ぶようになったという」(横浜の町名　平成 8 年発行)

長くなりましたが、同じ横浜市から発行されている町名について書き写しました。57 年のは地名の語源については慎重に考察するよう求めています。それに対し、8 年のは、一般的に言われていることを記しています。(著者は同じ)

現在のところ、史料もないようですから、発掘などによって決定的な事実が出ない限り、難しい問題です。建武 2 年(1335)證菩提寺新阿弥陀堂の供僧の料田として「鍛冶谷」の地名が見えています。

鍛冶ヶ谷 1 丁目

平成 8 年、住居表示により、鍛冶ヶ谷町の一部から新設されました。

鍛冶ヶ谷 2 丁目

平成 8 年、住居表示により、鍛冶ヶ谷町、上郷町、中野町の各一部から新設されました。

南のまえ(みなみのまえ)

鎌倉街道の東側、本郷石橋近くの石橋酒店から八幡神社近くの地名です。この地名の所は八幡神社の南にあたりますから、その「南のまえ」と思われます。

中居(なかゐ)

鍛冶ヶ谷西公園、正翁寺、中居公園辺りの地名です。中居の語源に集落の中心部とあり、鍛冶ヶ谷の中居もその意味での地名でしょう。

中居丸山として鍛冶ケ谷式横穴古墳が 26 基ありましたが宅地造成で破

壊されています。

西谷(にしやと)

鍛冶ヶ谷第三公園、やまゆり幼稚園、東武本郷台団地辺りの地名です。これも鍛冶ヶ谷の西にあるとしての地名でしょう。

東谷(ひがしやと)

信号NTT本郷局前周辺、NTT本郷局、消防団駐車場、鍛冶ヶ谷公務員宿舎辺りの地名です。鍛冶ヶ谷でも東に位置していることからの地名でしょう。ここにも鍛冶ケ谷式横穴古墳が 8 基ありました。

北谷(きたやと)

北谷公園、フェイム本郷台南、ライオンズヒルズ本郷台辺りの地名ですが、これも同様な意味での地名でしょう。。

宮之前(みやのまえ)

八幡神社の前、鎌倉街道を挟んで反対側の地名ですから、八幡神社の前としての地名と考えられますが、かっては王子社や、天王社もありましたからどうでしょうか。

宮之前には横穴古墳が 25 基現存しています。

味噌野(みその)

NTT本郷局横を奥に入った高台、ライオンズヒルズ近くの地名です。味噌に因む地名か、神社に属し、果実・蔬菜などを調進した園地などありますが、どうでしょうか。

桂町(かつらちょう)　昭和 14 年　設置

> 低湿地を意味する「カツウラ」か、葛(カツラ)が転化して好字化されたといわれる。　本郷郷土史研究会

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

平島(ひらしま)・推古(すいご)・上耕地(かみこうち)・中耕地(なかこうち)・桂口(かつらぐち)・桂入(かつらいり)

桂町

「古代地名語源辞典」は、カツラとは自然堤防を意味するのではないかとする。また、「地名の語源」はカツラの地名の中にはカツウラの転じたものがあり、カツは低湿地、ウラは「末」から陸の末、すなわち海岸または低湿地の浦の意、とする。桂町の地域の北側には川が流れており、両説とも矛盾しない。香りがよいといわれる桂の木に因み、この字をあてたものかと思われ

る。(横浜の町名　昭和 57 年)
これも建武 2 年、證菩提寺新阿弥陀堂供僧の料田として「桂口・桂入」の地名が記載されています。

平島(ひらしま)

本郷中学校、共済病院、コープ平島辺りが平島です。語源に崖、山の中腹、縁、山の一部が平らになっている所、平地、平面の地などがあり、島は周囲を水に囲まれた陸地、村中の小区画などがあります。栄区の平島は平地から生まれた地名でしょう。

推古(すいご)

バス停椎郷辺りの地名です。横浜市史には推古(すいご)としていますが、昭和 3 年頃出された地番反別入圖には、「椎古(しいご)」と記されています。これも同じ小字界の中に「椎古と椎郷」が並んで記されています。
椎のつく地名は東関東地方では「砂地の痩地」に多いとしていますが、他に浸食谷かともあります。地元では椎の木の生えている土地としています。

上耕地(かみこうち)

公田交差点から本郷石橋にかけての地が上耕地です。耕地の語源に、低い地で川のある所・カハ(川)・ウチ(内)の約か・「耕地」で、新開墾地を示すか、などあります。上耕地は上川と下川に挟まれた地で、川地(河内)も考えられますが、むしろ、川と川に挟まれた肥沃な地を開墾した意味での耕地ではないかと思います。「上」は「中耕地・内耕地に対しての「上手」の「上」でしょう。

中耕地(なかこうち)

栄警察署、区役所、農協、公会堂辺りが中耕地といわれます。耕地の意味は上耕地と同じでしょう。上耕地に対しての「中」と考えられます。
昭和のはじめに出された鎌倉郡本郷村地番反別入圖を見ますと、中耕地の東隣が内耕地、その北に上耕地があり、その東隣は南河内と村名は違っても続いています。

公田町(クデンチョウ)　昭和 14 年設置

律令制度で口分田として与えた残りの田を公田(こうでん・くでん)等と呼び、官が人民に貸し与えた土地であった。その公田の所在地である。
本郷郷土史研究会

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

平台(ひらだい)・中耕地(なかこうち)・内耕地(うちこうち)・中谷(なかやと)・茶別当(ちゃべっとう)・小谷(こやと)・巻能寺(まきのうじ)・台(たい)・馬場(ばば)・上耕地(かみごうち)・高平(たかへい)・椎郷(しいごう)・荒井沢(あらいざわ)・長谷(ながやと)・大谷(おおやと)・池後(いけご)・新井澤(あらいさわ)・信濃ケ谷(しなのやと)・岸(きし)・し井郷谷(いごうやと)・平島(ひらしま)・坊ケ谷(ぼうがやと)・公所(くぞ)

高平・馬場については上郷町で記載済み

公田町

公田は「大宝令の制では乗田(じょうでん)(田地の内、職田や口分田として班給した残りの田、公田)のことになっているが、平安時代の中ころにはすでに治田(ぢでん)(新たに開墾した田)に対比する言葉となり、私墾田に対する公墾田・口分田をそういっている。そしてそれは更に神田(しんでん)(神社の用に充てる田地)・寺田(じでん)(寺院の用に当てる田地)などに対して国衙領を指すのが普通である。そして鎌倉時代に入ると専ら国衙領の田をいった。」(鎌倉市史総説編)ものである。幕府の公田でないとすると、「クテ」で湿地を現す地名ではなかろうか。公田の地名の起こりについて、明治時代の「皇国地誌」は「往時本村ノ米ヲ以テ鎌倉覇王ノ食料ニ充ツ是公田ノ名ノ由テ起ル所ト云フ」という。いわゆる「公田」の遺名だとするのである。しかし、建武 2 年(1335)の文の書にある「後田」が現在の公田町であるといわれているので、果たしてこの地名が鎌倉幕府の公田の遺跡であるかどうかはにわかには断定できない」(横浜の地名　昭和 57 年)
公田とは「公田(コウデン)」というわが国古代の班田法で、位田(いでん)・職田(しきでん)・口分田(くぶんでん)などとして与えた残りの田のことであり、正方形の耕地を縦横三列ずつに 9 等分したその中央に位置した公有の田をいう。周囲の私田を耕すものが共同で公田を耕し、その収穫を租税とした。鎌倉時代には国衙領(平安後期以後、国司の統治下にある土地、国領)の田をいったという。(横浜の町名　平成 8 年発行)

上耕地(かみこうち)

公田交差点からバス停公田団地、富士スーパー、辺りの地名です。桂町の上耕地と同じ意味になります。

内耕地(うちこうち)

栄図書館周辺の地名です。上耕地に隣接していますから、上耕地の内側という意味の地名でしょう。

中耕地(なかこうち)

小岩井商店、湘南信用金庫辺りの地名です。地番反別地図を見ますと、桂町の中耕地の一部分が公田町に入っています。公田と桂町は入り組んでいて同じ地名が幾つかあります。

小谷（こやと）

ニーズランドの辺りから桂台第一遊水地の地名です。「小」は小さい、わずか、の意味ですから、小さい谷戸の意味から付けられた地名でしょう。

公所谷（くぞやと）

小谷の先、ニーズランドの奥にある遊水地（かっては谷だった）辺りの地名です。公所とはクショの転で、役所、官衙などの所在を示す地名か、他に、葛にちなむ地名、崩壊地形などが考えられます。地元では役所のあった所としています。「くぞ谷」を役所のあった所としての地名として決めるには、文献もなく、決定をかくのですが、公田、田所の地名があることから考えますと何らかの役所があったのではないかと推定するのみです。

長谷（ながやと）

かぜの子クラブ、上臈塚、ながやと子どもの遊び場辺りの地名です。長く延びた地形、傾斜地などが考えられます。

台（だい）

皇女神社辺り地名です。台は山頂、台地の略、などですが、地形から見れば、上耕地橋から坂道を上がりますが、神社の周辺は更に高くなっていますから、山頂ではなく、台地の略の台なのでしょう。

平台（ひらだい）

永林寺、神明社、町のはらっぱ辺りの地名です。平で傾斜地、斜面、山の中腹、などがありますが、地形から考えると、傾斜地にある台地でしょう。

茶別当（ちゃべつとう）

桂台小学校、桂台地域ケアプラザ、桂台西1･2丁目辺りの地名です。
別当で中世、荘園の事務を担当した荘官、鎌倉幕府の官職名、その居住所領による地名、神宮寺の僧官名による地名などがあります。
茶はお茶と考えられます。お茶を管理していた僧か荘官の住まいがあったのでしょう。

中谷（なかやと）

公田団地、公社公田ハイツ、ひこしが谷、坊ケ谷辺りの地名です。中に、地域の地理的中央、政治・行政・経済の中心地、山などの間、二つのものに挟まれた間、などがあります。平台と長谷に挟まれた地として中谷でしょう。

坊ケ谷（ぼうがやと）

中谷の中の地名として坊ケ谷があります。坊ケ谷に大長寺関係とされる慶岸寺跡（公田町 678）があり、この寺を坊として、坊ケ谷の地名になっていると話されます。以前は山裾に墓や卵塔などがありましたが、大長寺と長慶寺へ引き取られ、現在は寺跡を偲ばせるものはありません。

ひこしが谷（ひこしがやと）

中谷の中の地名として「ひこしが谷」があります。慶岸寺跡の先の民家の裏山に鍛冶ケ谷式の横穴古墳が 12 基あり、地元では「鎌倉滅亡の折、山伝いに逃れてこの地に住みついた「ひこしろう」という偉い人の名が地名になった」といわれます。その他、「ひこ」で田畑の出っ張った所、秀でた所、があり、「しろう」に人名か、などがあります。

権現森（ごんげんもり）

本郷郷土史研究会の研究会報第 2 号に、「公田団地バス停付近は権現森と呼ばれ、・・・・この社は風土記稿に御霊社と記され、権五郎景正を祀るもので、明暦 3 年(1657)10 月の再興の棟札に五郎大権現と記され、公田村桂村の鎮守様で村持ちでありました」と記されています。
一方、公田団地内の集会場と元相鉄ストアーの間（バス停公田近くです）にある森を権現森と呼び、その森に徳川家康公の尊称である権現神社が祀られていたところから権現森と称されていたといわれ、現在、権現神社は個人の邸宅に祀られています。
一般的に徳川家康の尊称を権現様としていますから、権現神社のある森として権現森の地名となったのではないかと思われますが、「再興の棟札に五郎大権現」と記されていたのでしたら、鎌倉権五郎景正を祭神とする御霊神社（現在は神明社の合祀）のある森としての地名となります。
御霊神社が元祀られていた場所も神明社の下辺りという説もあります。
権現は仏や菩薩が仮の姿をとって現世に現れることをいいます。

巻能寺（まげのうじ）

桂台西 1 丁目、NEC大船アパート、湘南桂台団地辺りの地名です。
巻能寺という寺があって地名になっているという説もありますが、寺があったという記録がありません。巻に、牧場、山で取り巻かれた地、丘や山麓を取り巻いたり、川沿いに半円状に連なる集落の名などがあります。
能にノ（野）を長音化したもの、たわんだ地形などが。寺に、寺の他、役所、国衙などがあります。地元の方から開発前の地形をお聞きしますと、巻能寺辺りは山の頂上で南向き斜面に畑があり、公田をはじめ、方々からの尾根道が交差していたと話されます。この地形から道が取り巻いてか、山が取り巻いての地名なのか、寺の語源が公田の地名に関連して考えさせられます。

大谷（おおやと）

公田の奥、茶別当橋の先の共同墓地辺りの地名です。地形を見ても大きい谷戸と思えます。

椎古（しいご）

ライオンズマンション本郷台、トヨタカローラ、信号公田小学校入口周辺の地名です。（椎古については桂町に記してあります）

椎郷（しいごう）

バス停朝日平和台の近く、椎郷屋商店辺りの地名です。椎で、植物の椎の樹木に因むものか、砂地（自然堤防）の瘦地、などがあります。

信濃ケ谷（しなのやと）

バス停椎郷の先の山際に立つ栄聖仁会病院辺りの地名です。地元では信濃（長野県）から来た人が住んだことからの地名といわれます。

荒井沢（あらいさわ）

荒井沢池を水源とする荒井沢川の両側から荒井沢公園辺り、一部高台もありますが、川にそっている所の地名です。荒で、暴れ川か、常に流路が変遷されるかなどがあり、沢は山間などの湿地とあります。暴れ川で常に流路が変わった山間の湿地からの地名でしょうか。

洗井沢（あらいさわ）

公田の奥、今泉に隣接した所と、桂台西 2 丁目坂道沿い辺りの高台の地名です。荒と洗、文字は違いますが、読みは同じで語源も同じようです。荒と洗の文字と高台という地形の違いが地名の文字の違いに表されているのではないでしょうか。

笠間町（かさまちょう） 昭和 14 年 設置

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

通町（とおりちょう）・岩井口（いわいくち）・扇子谷（せんすだに）・田立前（たりゅうまえ）・打越（うちこし）・田立（たりゅう）・反町（そりまち）・千ケ台（せんがだい）・仲宿（なかじゅく）

笠間町

地名学者の鏡味完二・明克の「地名語源」は、カサマとは上流（カミテ）（カサ）の狭門（マ）あるいは湿地の（マ）であるとして「古代地名語源辞典」は、「和名抄」の大和國宇陀郡、伊勢国員弁郡、加賀國石川郷、そして「常陸国風土記」の新治郡に各々笠間郷があることをあげ、カサマとは「上の方」を示すカサに、場所を示す接尾語マのついた形か、とする。

また、地理学者の吉田茂樹は、カサマとは「風間」で風の吹き下ろす谷間か、とする。近世以降の笠間村は、柏尾川沿いの平地にある島状の小丘陵にはさまれた所、カサとはあるいはこの小丘陵を「笠」に見立て、「間」とはその言葉通り間（あいだ）を示すのではなかろうか。「笠間」の地名の中には笠間神社に因むものもある。（横浜の町名昭和 57 年発行）

建武 2 年、證菩提寺供僧の料田として「笠間」の地名が記されています。

笠間 1 丁目。笠間 2 丁目・笠間 3 丁目・笠間 4 丁目・笠間 5 丁目

平成 12 年住居表示施行にともない笠間町の一部から新設された町。

通町（とおりちょう）

鎌倉市岩瀬（鎌倉女子大）と隣接し、バス停平島から大船より、横浜トヨペット、川崎重工社員寮、野村マンション、法安寺、青木神社、辺りの地名で、現在の 5 丁目辺りになります。道路、街路、街道、それらに面した町をいう。町の表通り、本通、中心街路に面した町、などがあります。江戸時代、東海道戸塚宿の入口である吉田大橋を分岐点として笠間をへて山内にいたる鎌倉への捷道（近道）として賑わった吉田道に面しているところからの地名で、今も鎌倉に通じる道として利用されています。

仲宿（なかじゅく）

法安寺先の民家の表札に「仲宿」と記されていますが、通町の中の地名でしょう。仲宿は宿場の中心地、正規の宿場と宿場の間の集落をいうともあります。笠間の仲宿は、通町という街道に面して「宿」があり、地名になったものと思います。

岩井口（いわいくち）

JR東日本大船総合事務所、労働基準監督署などの 1 丁目辺りから、笠間中央公園辺りの 2 丁目の地名が岩井口です。イハ（石）・ヰ（井）で石川、岩の多い川の意味、岩井で岩間の泉を井としたもの、イハウ（斎。祝）で神を祭る場所のこと、などがあります。口は入口の意味でしょう。

扇子田（せんすだ）

バス停笠間の周辺の農林水産省戸塚寮、大船グリーンハイツ、森永牛乳らの 3 丁目辺りの地名です。現在は埋め立てられて、田は見ることもありませんが、かっては田が扇の形をしていたといわれます。

このような特殊な田として、埼玉県の高麗川に巾着田があります。巾着田と扇子田は同じ工法で造られているとして渡来系の人達が造ったのではないかと言う説もあります。扇子田の地名はこの扇子の形をした田から付けられた地名でしょう。

田立前（たりゅうまえ）

田立町内会館、鹿島神社、大船第一マンション、東大船マンションなど、3 丁目を主体とした所の地名です。語源に、竜の伝説に基づく地名、龍神信仰によるもの、立で高くなった所をいう、館、屋敷のあった所、などがあります。笠間には立竜舞の伝説（本郷の民話と伝説）があり、その伝説から生まれた地名かも知れません。

内越（うちこし）

笠間小学校、パークタウン大船、タツノ横浜厚生会館、笠間ポンプなど、

環状 4 号線の笠間大橋に向かって左側辺りの地名です。長沼町と飯島町で「内越」について記しましたのでそれを見てください。

反町（そりまち）

反町は通町の一角、今の 5 丁目のいたち川花の木公園近くの地名ではなかったかと思います。反の語源に、何枚かの田が階段をなしているうちの中間の田、焼畑、もとは崖地、傾斜地、浸食地形などがあります。

明治以降、蛇行していた狛川を現在のように付け替えたといわれ、笠間公園もそれに伴って出来ていますから、反町の地形も多少変わっているのかも知れません。ここにも建武 2 年、證菩提寺供僧の料田として「曾利町」の地名が記されています。

千ケ台（せんけだい）

皇国地誌に「戸塚鎌倉間ノ往還ニ属ス・・・小菅ヶ谷村ヨリ来リ本村東部ヲ貫キテ字千ケ台ニ抵リ是ヨリ岩瀬村ト分界ヲナシテ・・・」記載されている中に記されている地名で、信号青木神社入口辺りの地名です。

「笠間四百年のあゆみ」によれば、笠間に「千騎台」という地名があったといわれ、「千ケ台」は千騎台が訛ったのではないか。今はないが、かって、「よせのね・こまよせ」などの地名があり、これらの地名から、「鎌倉から武蔵方面へ出兵する場合、狭い鎌倉に多くの軍兵は入らないから、主だった武将だけが入り、大部分の将兵はこの辺りで待機していたのではないだろうか。当地の平坦地部は深い湿田で、人馬の駐留に不適当である。人馬は高台に屯することになる。これが「千騎台」の語源ではなかろうか」。と記されています。

信号青木神社入口で鎌倉市岩瀬と隣接し、笠間十字路から鎌倉に向かう道路が貫いていますが、その東に松ヶ丘住宅、西に笠間 2 丁目（かつては浅野山と呼ばれていた）と、高台になっています。その地形と地名から、鎌倉で戦いがあった時、一度に多くの兵は入れないから主力隊が先ず入り、後の兵はこの辺りで待機していたのではないかといわれます。いつも出る話ですが、鎌倉時代から幾度かの戦いのとき、狭い鎌倉に大勢の兵や馬を一度に入れられないのではないか、待機させた所があったのではないか、その一つが港南区の馬洗橋辺りではなかったかという説もあります。地名からこのような歴史的なことも推察されるのです。

長尾台町（ながおだいちょう） 昭和 14 年 設置

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

久保前・寺の前・上の台・宮の前・雲雀子下・亀甲下・上ノ山

長尾台町

この地名の元となった長尾郷は、この辺り一帯のかなり広い面積を占めて

いたもので中世の文書などにその名が頻出している。

この地名は、古へ長尾氏がこの地の字台上に居住したことによるという。その真偽はともかくとして、長尾郷（村）のうちの台地の区域を長尾台と呼んだものであろう。

もっとも長尾という地名自体が台地（尾）に由来する地名と考えられるから、尾と台とは一種の重複語と考えてもよかろう。長尾台という地名は、長尾という地名より後の時代に作られた地名であろう。

この地の台地（字上ノ台の地）は柏尾川沿いの低地に北へ延びた地形を形成している。（横浜の町名昭和 57 年発行）

昔、長尾氏がここの字台に居住したことから「長尾台」と呼ばれるようになったという。（横浜の町名　平成 8 年発行）

正安 3 年（1301）の関東下知状に「鶴岡八幡宮領　長尾郷」とあり、長尾台の地名より、前の地名は長尾郷とされていたのが立証されます。

久保前（くぼまえ）

久保前は、長尾台公園、ロイヤルパレス 6 番館、シャンポール大船辺りの地名です。かっての地形は分かりませんが、上の台の下が窪地だったとしたら、その前として久保前の地名となったのかも知れません。

寺ノ前（てらのまえ）

柏尾川に近く、クレージュ、サワーハイツ、ワコーレ大船辺りの地名です。長尾台の寺としては山側の上ノ台に長谷寺があります。寺の前の地名の所は県道阿久和鎌倉線近く、寺の前に位置していますから、寺の前の地名が生まれたのでしょう。

上の台（うえのだい）

長尾砦に上がる坂道（陣屋坂）の左側、山側の地名です。長尾台町は柏尾川を前にした低地の部分と、長尾砦のあった山側から成り立っています。陣屋坂を上がった左側は上の台ですが、右側は宮の前となります。地形の通り高い所としての地名でしょう。

上ノ山（うえのやま）

上ノ台の一部分の地名、台より高くなっている所としての地名でしょうか。

宮ノ前（みやのまえ）

御霊神社周辺、陣屋坂右側周辺の地名です。御霊神社というお宮の前としての地名です。

雲雀子下（ひばりこした）

環状４号線を田谷に向かっての右側、ニコン、すし川澄、パン近江屋などのある辺りの地名です。雲雀子については雲雀の子が沢山いたのではないかと話される方もありますが、如何でしょう。

亀甲下（かめのこした）

バス停住友電工南門辺りの地名です。この地名は田谷・金井・長尾台とあります。金井の玉泉寺から眺めると、亀の子が首を伸ばして柏尾川の水を飲んでいるような山の形からつけられた地名といわれます。

長沼町（ながぬまちょう町）　昭和14年　設置

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

改正ノ一・改正ノ二・改正ノ三・改正ノ四・改正ノ五・改正ノ六・改正ノ七

小谷・堀内・辻前

長沼町（ながぬまちょう）

「長沼町の地域は柏尾川左岸にあり、川沿いの低地が少し山側に広がっている所、恐らくは柏尾川の蛇行に伴い作られた河跡湖がこの地名の命名された頃（中世かそれ以前）にまで残り、地名になったのではあるまいか。これは全くの地形と名称からの仮説ではあるが、この低地以外に長沼という地名の起源は求め得ないのではなかろうか」。（横浜の町名 57年より）

「長沼は遠のいた海の跡に残されたところが、沼になっていた地形をいっているようです」。（戸塚区の歴史）

横浜の町名では、柏尾川の蛇行に伴い作られた河跡湖、戸塚の歴史は海のひいた跡と、河と海の違いはあってもどちらもその跡の地形からの地名としています。

長沼では大正５年、耕地整理をした際、それまでの地名を改正ノ一というように、住居表示を変更したため、風土記稿に記されています地名の殆どは分からなくなっています。

次に記しますのは、地元で今も伝えられている地名です。

奈光谷・奈古谷（なこうやと）

バス停奈光谷辺りの地名が奈光谷ですが、古くは奈古谷と書いていたと古老は話されます。奈古、名子、那古、名古、奈呉と書いて、ナゴヤカ（和）と同じで平坦地、小平地、砂地をいうようです。他に、中世に荘園領主などに隷属していた下層農民に因む地名とか、主家に代わって荘園を開発した農民の居住地を指すなどがあります。

判官台（はんがんだい）

判官台は県営貝殻坂ハイツ辺りを指し、鎌倉時代、長沼の領主だった長沼氏が、本国とする下野國芳賀郡長沼邑より鎌倉出仕のおりの居館跡と伝えられています。長沼五郎宗政は関東八家の一小山四郎政光の子で源氏に仕えた御家人といわれ、正安寺に石碑があります。

皇国地誌に「長沼判官宗政ノ墓ト称ス。東西四間、面積拾六坪、本村東南々ノ方字判官台ノ山間ニアリ、本村·正安寺ニ属ス。往古ヨリ碑石ナシト雖モ、郷民之ヲ尊崇スル事久シ」と記されています。

風土記稿に**堀の内**という地名が記されていても、今はご存知の方もないようですが、館の周りには堀を巡らせたとされますから、長沼氏の館跡とされる判官台に堀の内の地名があったのかも知れません。

打越谷（うちこしやと）

長沼町577辺りの地名です。昔の577番地辺りは両側が山で、谷間に家が建っていたとか、今も現地に立つと当時の地形が感じ取られます。

語源に、谷から山頂への道を登った向こう側、山を越した辺り、山を越える所、鞍部の意味もあるか、などがありますが、地形から考えると山を越える辺りではないかと思われます。長沼では今も念仏講が続いており、その時使用される鐘に「打越谷」と記されています。

高見谷（たかみやと）

バス停長沼近く、柏尾川に向かって右側、長沼町726辺りの地名を高見谷とされています。語源には高くなっている所、小高い所とあります。

長沼の高見台も周りの土地から一段高くなっている地形から語源通りの地名と考えられます。栄区の笠間、小菅ヶ谷、長沼と高見の屋号をもった家がありますが、どの家でも大水で周りの家が水に浸かっても大丈夫だったといわれます。

二本松谷（にほんまつやと）

長沼町477辺りの地名ですが、近くの山に２本の大きな松ノ木があったことから付けられた地名といわれます。そうだとすると、当時の人々が「あの山、この山」と呼ぶのではなく、その山の特徴をとらえて付けられた地名といえましょう。

その松も今はなくアンテナが立っています。

稲荷谷（いなりやと）

長沼町の八幡神社後方辺りの地名です。周りは山でその谷間に家があり、稲荷社が祀られていたことからの地名といわれます。

飯島町（いいじまちょう） 昭和 14 年 設置

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

樋の口・長谷・殿谷・西谷・内耕地・外耕地・清水窪・滝窪・滝ノ前・久保・打越・長谷窪・井戸窪・夫古ろし・大道・長ケ谷・広ケ谷・北ノ谷・下坂・南ケ谷・六反目・三ノ宮・清水垂・関山・滝ケ久保・砂田・宮ノ前・五反田・平台・大井戸谷・大地原・奥屋敷・滝山・枯松・御伊勢山・新林・池ノ谷・子神台・魚ケ谷・横まくり・永谷・涼戸・うさぎ谷

飯島町

「イー」とは、「上の方」、「山手の方」「自然堤防や段丘などの小高い所にある谷や土地」をいい、（地名の語源）、シマは海の中の島だけでなく、陸地の小高い所をも古くは呼んだものであるから、イイジマとは柏尾川左岸の飯島町の丘陵部を呼んだものであろう。

「日本地名語源辞典」は、イイジマは東日本に多くみられる地名で、イイジマの地名には「土地を共同開発した所に集落が立地した「イエシマ（家島）」または「ユイシマ（結島）」などの転化が考えられる」とするが、飯島町の場合はどうか。」（横浜の地名　昭和 57 年）

町名は旧村名を採った。地名研究で「イイジマ」は「丘陵部」を意味するという。（横浜の町名平成 8 年）

飯島の地名は建武 2 年（1335）證菩提寺文書に出ているのが初見です。

樋の口（といのくち）

飯島でも南の東海道線と柏尾川に挟まれた所の地名です。飯島橋の下辺りになり、一部、駐車場になっているようです。トヒ（樋）の意味で水路、川。古くはトヒは人工のものに限らず、水の流れをいったようです。

飯島の「樋の口」は柏尾川に面していますから、かっては水の流れや水路になっていた可能性もあります。口は出入口、川の合流点があります。

飯島の樋の口は狛川と柏尾川の合流点です。

その意味では水の流れている所に合流点があるとしての地名でしょう。

滝ノ前（たきのまえ）

これも東海道線と柏尾川に挟まれた所で、樋の口の北辺りの地名です。現在は住友電工の駐車場になっています。飯島に滝久保の地名がありますが、その前にするには離れすぎています。語源に、川の急な流れ、懸崖から激しく流れ落ちる流水、などがありますが、滝の前も柏尾川に面していますから、川の急な流れ、或いは激しく流れ落ちる所を前にしての地名ではないでしょうか。現在、光長寺の山門右に祀られている不動明王は、元は柏尾川の近く、飯島中学校よりの土手に祀られていたようですが、水が豊富に湧いていたと地元の方は話されます。

久保（くぼ）

東海道線の東側、バス停久保近くの飯島幼稚園、光長寺、飯島小学校、中学校辺りから、久保橋下の丸下工芸、たちばなや、ツノダ産業辺りの地名です。この地番の中には、低地に位置している飯島中学校や、高台に位置している光長寺、飯島小学校辺りも久保であり、団地が造成される前は山であり、久保は周囲より窪んだ所、谷間の語源のような地形だったのでしょう。

子ノ神（ねのかみ）

バス停久保から坂道を上がる途中、左の高台に子ノ神が祀られていたところから付けられた地名です。

長谷窪・長谷久保（はせくぼ）

バス停飯島中学校前の左右、西飯島第一公園下、富士見農園辺りの地名です。長谷の語源に、川筋の果てる所、最上流、二俣谷の分岐点、道路が二方向に分かれる分岐点などがあげられています。久保は周囲より低く窪んだ所、山頂の窪み、尾根のたわみ、などがあります。

なこ山・奈光山（なこやま）

飯島団地 1～3 号棟と 1～4 号棟の間辺りにあった山といわれます。長沼町で奈光谷の地名がありましたが、飯島に奈光山があり、その山の裾の谷が長沼にあったのでしょう。奈古、名子、那古、名古、奈呉と書いて、ナゴヤカ（和）と同じで平坦地、小平地、砂地をいうようです。他に、中世に荘園領主などに隷属していた下層農民に因む地名とか、主家に代わって荘園を開発した農民の居住地を指すなどがあります。奈光の語源として平坦地、小平地、砂地をさすというのもありますが、山という地形から考えると、主家に代わって荘園を開発した農民の居住地を指すとしての地名ではな

いでしょうか。

殿谷（とのやと）

ひかりが丘自治会館からバス停ひかりが丘入口、飯島保育園、薬師堂、飯島団地、飯島郵便局、ウエストウイング、イーストウイング辺りの地名です。殿の語源に、棚状の地、段丘、貴人の邸宅によるものか、他に、高くなった所、自然堤防、微高地として有力者の占有地に相応しい所にあたるのではないかと推測している専門家もあります。殿谷の地形を見ますと、飯島団地辺りは高く、ひかりが丘自治会館や薬師堂辺りにかけて低くなっていきます。

殿谷に「殿谷」の屋号を持つ家があり、その裏山に飯島城と伝えられている跡地があります。途中には平場もあり、頂上に上がれば、大船方面が一望されます。

飯島城について、「日本城郭全集に、飯島町に殿谷という地名がある。誰がいつの時代にいたかは伝わっていない。「小田原衆所領役帳」によると、飯島村には井出兵部丞という者が百貫役、高城胤辰が十七貫を領していたという。井出氏の館があった所ではないか。」

「日本城郭大系には、飯島町の南西部の殿谷については、従来、井出兵部丞の城跡とされていたが、そのような伝承は現地には現在なく、城館の存在は今のところ明らかではない。「新編相模國風土記稿」の飯島村と小雀村の条に記された高城下野守胤辰は、大谷口（松戸市小金）の城主で、これも飯島にあてることはできない。また、「雲頂庵文書」の天正五年（1577）の四月と七月の日付のある二通のうち前者には、飯島但馬守の名前が記されているが、後者の押紙には大谷口城主とあるのが注目される。（相州古文書）井出氏について詳細は不明だが、あるいは飯島村の殿谷以外の飯島を領したものであろうか。仮にそうとしても、これは館跡とするほうが妥当かも知れない。なお、戸塚区内の殿谷と呼ぶ地名は飯島、小雀のほかに柏尾町にもある」。と記されています。「とよだ　その風土と歴史」には、「後北條氏は飯島に館を設けています」。と簡単に記されているのみです。井出兵部丞は玉縄城主北條綱成のもと、馬廻衆を、高城下野守胤辰は他国衆として仕えていました。胤辰は大谷口（松戸市小金）の城主ですから、確証はありませんが、どちらかといえば井出氏の館があったのではないかと思います。長尾砦は敵に対いして防衛が出来る砦としての要地ですが、飯島の殿谷は見晴らしは良くても砦としては険しさがなく、館だったのではないでしょうか。地元では殿様のいた所としています。

殿谷の一部に「奈古山　なこ山」がありますが、殿谷を館としていた主家に代わって開発した農民の居住地があったのではないかと推測しているのですが。

内耕地（うちこうち）

フアンケル、三菱電機、ダスキン、ホンダ、スリーエフ、豊田高校などのある辺りの地名です。外耕地と隣接していますから、その内側の意味であり、耕地は低い地で田のある所、新開墾地かなどがありますが、ここでは外耕地に対して内側の低い所にある耕地としての地名でしょう。

外耕地（そとこうち）

飯島スイミングクラブ、国井工務店、タツノ、イースタンなどがある所の地名です。外耕地は狛川を挟んで笠間に面していますから、飯島の外側の低い地で田のある所として、又、内耕地に対しての地名と考えられます。

涼戸（すずみどう）

すずみどう公園辺りの地名です。道路に面して六地蔵尊や石仏が安置してあり、公園背後は小高くなっています。「すずみ」の語源に、稲積形の山があり、「戸」は場所を示す接尾語、トコロの意味。ト（戸）で出入口などがあり、稲積形の山の出入口だったのでしょうか。

南谷（みなみやと）

根岸線を挟んで南側にある鷲宿、エステハイツ大船辺りの地名です。

根岸線を挟んでほぼ南谷と北谷に分かれています。位置が南に面しているとしての地名でしょう。

下坂（しもさか）

バス停下坂谷から奥に入った辺りにある鎌倉郡33観音霊場の31番札所の勝福寺への道の左右から、本郷台ヒルズ、飯島下坂公園周辺の地名で、その先には飯島団地があります。

坂は団地からバス停まで続いています。「下」に川の下流、高い所に比べて低い所、中心から離れた部分、などがあります。下坂の場合、団地は高い所にありますから、その高い所に比べて低い所という意味での地名ではないでしょうか。

久保台（くぼだい）

地番から判断すると、飯島団地、3－9号棟と、3－6号棟の間辺りの地名ではないかと思われます。周囲の地名に久保があり、低地や小高い所に

位置していますから、谷間、又は、窪んだ所だったと思われます。
久保台の台は台地、山頂などを意味していますから、久保の山頂にある所として久保台の地名が生まれたのではないかと思います。

井戸窪・井戸久保（いどくぼ）

ルミエルカーサーがある辺りで、長沼と隣接しています。井戸について、ヰ（井）・ド（処）で、「井」は泉や流水から水を汲み取る所、谷川から水を引いた貯水槽、ド（処）は、沢の合流点、場所を示す接尾語、谷間の狭くなった所をいう、などがあります。

打越（うちこし）

丸久商店街から駐車場辺りの地名です。語源に、谷から山頂への道を登った向こう側、山を越した辺り、山を越える所、鞍部の意味もあるか、などがあります。飯島の内越の前面には飯島団地の高台があり、造成前を考えると、山を越した辺りとしての地名でしょうか。

北ケ谷（きたのやと）

信号飯島跨線橋入口から柏尾川の方に向かって先に進んだ右側、ノースバレー辺りの地名です。根岸線を挟んで南谷と北谷の位置となります。南ケ谷に対して反対側の北に位置するところからの地名でしょう。

三ノ宮（さんのみや）

三の宮公園辺りの地名です。語源に、元は国々の神社に順位をつけて、その国の一宮、二宮、三宮などと呼んだものがその神社所在地の地名となっている。とあります。
飯島の三宮の場合、昔、諏訪社が祀られていたと伝えられているのみです。諏訪社は信濃国の一宮です。

滝窪・滝久保（たきくぼ）

バス停大道の所で石段を上がった先の山本畳店や、その前の飯島南公園、コープ南部センター、ジュネス大船、町のはらっぱ辺りが滝久保です。今は見られないようですが、かっては滝が流れていたといわれますから、それが地名になっていると思います。滝久保には 5 基の横穴古墳がありましたが、宅地造成のため、破壊されました。

関山（せきやま）

飯島町第一公園辺りと、飯島南公園と小菅ヶ谷に挟まれた所の地名です。小菅ヶ谷の方は低く、関山は高台にあります。
関山は隣接している小菅ヶ谷から見れば高台ですが、南公園は現在でも

高く、関山は山の中腹に位置していたのではないかと思われます。
語源に、谷の奥まった所、挟まった所、などがあります。地域も狭く、挟まった所としての地名でないかと思います。ここにも、5 基の横穴古墳がありましたが、宅地造成のため破壊されました。

宮ノ前（みやのまえ）

ニューシティ本郷台辺りから、三島神社、般若院辺りの地名です。この地名の中に三島神社が祭られていますから、神社の前としての地名でしょう。

広ケ谷（ひろがやと）

信号飯島跨線橋入口近く、バス停飯島前のホンダプリモや、石井酒店辺りの地名です。広ケ谷は広い所、低い地、緩傾地がありますが、この地番で示されている所は低地で広い所から付けられた地名でしょう。

長谷（ながやと）

バス停飯島上町近くの豊田地区センター、江口医院、豊田消防署、セブンイレブン、サイゼリヤ辺りの地名です。語源に、川筋の果てる所、最上流、ハセ（挟）で、山、川などに挟まれた地形、二俣の分岐点、などがあります。地形から見ると、豊田地区センター前からは坂道を上がるようになり、かっては山だったのではないかと思われます。
そうすると、この山と市民の森に挟まれた地域の地名としての長谷だったのでしょうか。

奥屋敷（おくやしき）

本郷キリスト教会近く、市民の森の下で、奥まった所に屋敷があることからの地名でしょう。江戸時代、名主をされていた家の屋号が地名になっています。長谷の中の小名です。どの地域でも屋敷の屋号をもつ家は名主を務められていたようです。

五反田（ごたんだ）

飯島東幼稚園、須藤自動車、造園社辺りの地名です。ここに五反の田かあったという意味の地名といわれます。

枯松（かれまつ）

飯島市民の森の一部、本郷台キリスト教会、相模メール辺りの地名です。「枯」で山の崩れた所、谷川に沿った細道など、「松」で松を植生したものか、などがあります。地元の方のお話ではかって市民の森に大きな松ノ木があったが、枯れたのでそれが地名になったと聞かされているとのことです。
長沼の二本松のように、松ノ木が二本植えられていたということの地名から

考えれば、枯れた松ノ木のある山としてでも良いのでしょうか。

お蔵の下（おくらのした）

コーポ勝美後方、飯島市民の森側辺りの地名です。江戸時代の年貢米を納めて置く蔵が 5 棟あったといわれ、その蔵の下にある所の地名でしょう。

伊勢山（いせやま）

飯島下坂公園近く、ヒルトトップハウス 3－8 号棟あたりの地名です。伊勢山には神明社が祀られていましたが、祭神は共に天照大御神ですから伊勢山の地名になったのでしょう。南谷を中心に伊勢講がありましたが、現在はありません。神明社も明治 41 年、三島神社に合祀されました。

平台（ひらだい）

本郷台 2 丁目の一部の地名です。山の一部が平になっている所、平地、平面の地、平原、などがありますが、飯島の平台の地は宅地造成で地形が変わっていますが、山の一部が平になっていた所の地名と考えられます。

大地原（おおじはら）

本郷台大地原公園、大地原ハイツ辺りの地名です。地で大地、土地、陸地などがあり、原で広い平野、開拓地などが考えられます。大地原は広い畑だったようですから、広い大地の意味からの地名ではないでしょうか。

子ノ神台（ねのかみだい）

大地原と池の谷の間にある地名で、本郷台 1 丁目辺りと思いますが、地形がすっかり変わって判然としません。子の神とは、大黒天のことで、大黒天の神位が北（子の方）なので、子の神として祀られました。大黒天は米俵の上に乗っているように、農業の神として信仰されました。

池ノ谷（いけのやと）

本郷台 3 丁目、4 丁目辺りの地名です。窪地に自然に水がたまった所、土地を掘ったり、堤を築いたりして水をためた所、などがあります。皇国地誌の池の谷に「溜池」として記載されています。現在の「飯島ワンワン公園」がその池の名残です。池の谷の地名は土地を掘ったり、堤を築いて水を溜めた「溜池」からつけられたのでしょう。

夫ころし（ぶころし）

本郷台 3 丁目の一部の地名です。地元の古老の話では、ある時の戦いで敵に追われた人達が追上（小菅ヶ谷）から平台に逃げたが、「夫ころし」で殺され、「池の谷」で焼かれ、花立（小菅ヶ谷と下倉田の境）に埋められと

いう話が伝えられています。

「夫・ブ」で、夫役の人夫、戦いにかり集められた人足などがあります。「ころし」で、殺人、殺人事件、殺し文句、などがあります。戦いにかり集められた人足が殺された所としての地名なのでしょうか。追上・花立の地名から鎌倉道が関連しているのではないかと思います。

植木原（うえきはら）

本郷台 3 丁目の遊水地近くと 3 丁目の一部の地名です。ウエ（上）・キ（接尾語）の転で、高くなった所があります。それとも植木にする木を植えていた原だったのでしょうか。鎌倉市にも植木の地名があり、植木業が盛んだったようです。

魚ケ谷（うおがやと）

県営みどり野ハイツ、ワンワン公園、本郷台 3 丁目辺りの地名です。うお（魚）で漁場を意味するか、と語源にありますが、魚に結びつくものがありません。池の谷の溜池に近く、この池に魚がいての関連か、谷戸の地形が魚に似ていたかなどが考えられます。

金井町（かないちょう） 昭和 14 年 設置

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

東ノ根・谷戸山・谷村・谷山・向の根・越の根・辻の前・家下・守屋・内田・水尻・井戸田・柳町・島畑・亀甲山・大黒面・十二天前・一町田・西谷戸・東谷戸

金井町

町名は旧村名を採って金井町となった。カナイとは一般的には、鉄分の多い井戸のある所（日本地名語源辞典）をいうというが、柳田国男は「カナイ（金鋳）」で製鉄に関する地名という。亦、カナ・イ（曲・井）とあるとするなら、イとは普通「川」を示す語であるから「曲がった川」ほどの意味となる（横浜の町名 昭和 57 年発行）

今のところ、鉄に関した話は聞かれませんから、柏尾川の曲がった辺りに位置する町としての地名でしょう。

正和 3 年（1314）の関東御教書に「鶴岡八幡宮領相模國長尾郷田屋・金目両村」として書かれているのは金井村のことで、これが金井の初見と思います。

東の根（ひがしのね）

金井の東、バス停「金井」（戸塚に向かって左側）の辺りが「東の根」です。この東は金井の東という方角を示し、根は根元、付け根などがあり、「根」と「嶺」は同源で山頂の意味とか、「大地にしっかり食い込んだ物」の意味、とされていますから、金井の東にあって大地にしっかり食い込んだ土地を意味しているのでしょうか。

辻上（つじのうえ）

八幡神社辺りの地名で、豊田青少年の家辺りも含まれて居ます。バス停に「辻前」がありますが、その辺りが「辻の前」です。その「辻の前」の上になるから「辻上」の地名が生まれたのではないでしょうか。この辻について、地元では、豊田青少年の家の辺りを陣屋跡と、又、バス停金井近くの四辻を「陣屋の辻」として、鎌倉時代長尾氏の陣屋があったと伝えています。

鎌倉円覚寺雲頂庵宛の長尾忠景書状によると、「金井」に長尾領があり、興山式部丞が代官を勤めているとありますから、地元に伝えられている陣屋が立証されます。

東ノ谷（ひがしのやと）

これも金井の東に位置するとしての「東ノ谷」です。東は方角であり、「谷」について、「谷という認識は、南関東に多く見られる台地の樹枝状谷が即ち湿地であるため派生したものであろう」と語源に記されています。

西ノ谷（にしのやと）

東ノ谷に隣接していますから、その東に対しての西でしょう。

谷山（やさん）

玉泉寺辺りの地名が「谷山」です。「谷」はヤツの略で「湿地」の意味とされています。「山」と書いて（さん）と読ませる時は「寺の山号による地名」の他、敬称の「様」の転の「サン」もあり、玉泉寺の山号ではありませんが、谷にお寺があるところから「山」と書いて（さん）と読ませる地名となったのでしょうか。

向の根（むこうのね）

「谷山」の隣り、小雀との間に挟まれて「向の根」の地名があります。「向」について、「相対する前面・前方の意味」「何かを隔てた反対側」の意味とされています。

金井の「向」は何に対してか、玉泉寺に隣接していますから、玉泉寺の「向」なのかとも考えられます。「根」は「東の根」と同じ意味でしょう。

内田（うちだ）

「向の根」に隣接して「内田」の地名があります。「内」の語源に、「内側」の意味、入り込んだ地形、山野の小平地、などがあります。地形から見て内側の意味でしょうか。

谷村（たにむら）

谷山に隣接した地名が谷村で、八幡神社下周辺の地名です。

「谷」は山と山の間、ほとんど平地のない地形をいうより、田と関連して小さくとも谷底などの平地を指す名称か、などがあります。

村は「人の群れ住む所、集落」の他、「農村集落」の意味、「村落の中心部」などがあります。金井の場合、周囲を山に囲まれた平地に人家が立ち並んでいたようですから、周囲を山に囲まれた村落の中心地としての地名ではないでしょうか。

東の根からはじまって時計と反対周りに地名を追いましたが、その中心にあるのは玉泉寺と八幡神社で、その北側を屏風のように山並みが続いています。金井の場合、ここまでは人家が立ち並んでいますが、後は水田でした。（昭和3年頃）

昭和35年頃の田畑は、水田が50町歩、畑が30町歩あったといわれ、田畑の割合からも柏尾川に面しての水田地帯だったことが知れます。

家下（いえした）

バス停金井の近く、日産プリンスや金井自動車辺りの地名です。「辻ノ上」と隣接して、「家下」の地名がありますが、

昭和3年の「神奈川県鎌倉郡豊田村地番反別入圖」を見ますと、その道をはさんで右には家が並んでおり、左の水田の地名が「家下」とあるのが相応しく感じます。語源の「家」は「家屋・宅地・集落」とあり、「下」は上下を示していると思います。人家の立ち並んだ集落の下としての地名でしょう。

辻の前（つじのまえ）

バス停「辻前」一帯の地名が「辻の前」です。バス停「金井」辺りの四辻を「陣屋の辻」と伝えられていますが、その前になる地名として「辻の前」があるのでしょう。

越の根（こしのね）

県立金井高校辺りが「越の根」です。「越」の語源に「越す所・山の頂上・山腹・水の湧き出るところ」などがありますが、金井の「越の根」は平地であ

り、田谷の「峯」に隣接していますから、「越す所」の意味ではないかと思われます。「根」は「東の根」と同様、大地に根をはった所でしょう。

十二天町前（じゅうにてんまちまえ）

金井公園、グランデ十二天辺りの地名が「十二天町」です。その前に八坂神社が祭られています。現在は八坂神社となっていますが、以前は十二天社でした。その十二天が祭られている前としての地名でしょう。

大黒面（だいこくめん）

十二天に隣接、現在の住友電工の寮になっている辺りの地名です。大黒面は畦道もつくれないような土の柔らかい土地をいいます。

一町田（いっちょうだ）

大黒面の東隣の地名が「一町田」です。田が一町あったか、一という文字から第一番目の意味でしょう。

水尻（みずり）

大黒面の西隣りが「水尻」で、「尻」の語源に、「シリ、後方、背後、末端、出口、裾」などがあげられています。

水田の多い金井では以前はいくつもの堰があり、その堰からの水の流れの末端ではないかと考えられます。

井戸田（いどだ）

「越の根」の下、バス停金井高校前辺りの地名です。「井戸」の「井」で泉や流水から水を汲み取る所、堀井戸、水路、川などが上げられていますが、水田に使用するための井戸があったのではないかと思われます。

柳町（やなぎまち）

信号金井高校の東あたり（住友電工内）の地名です。語源に、植物の柳によるものか、「ヤナ（斜面・堤防）」などがあります。この柳町は水田の中の地名ですが、町の文字は田と、音を示す丁をあわせて、田の間をまっすぐ通る道、あぜ道の意味を持っています。

守屋（もりや）

住友電工体育館のある辺りの地名が守屋です。語源に「きこりが山で働くとき寝泊りする小屋、焼き畑などを鳥獣の害から防ぐ見張り小屋」などがありますが、金井の場合はどうでしょうか。

島畑（しまはたけ）

金井の東端、柏尾川に面した所の地名です。語源に周囲を水に囲まれた陸地、川に臨んでいる州、川の曲がり目や川端の低地に出来た耕地、ひ

とつづきの広い田地などがあります。

亀甲山（かめのこやま）

金井の西端、田谷との接点になる所の地名なので、田谷にも亀甲山の地名があります。金井の玉泉寺から眺めると、亀の子が首を伸ばして柏尾川の水を飲んでいるような山の形からつけられた地名といわれます。

井戸田・柳町・一町田・島畑・亀の甲山・大黒面・守屋は住友電工の社屋となっています。

田谷町（たやちょう）　昭和14年　設置

新編相模國風土記稿・皇国地誌・横浜市史小名一覧他より

宮の前・大海・雲雀子・角田・一町田・亀甲山・中の橋・三王下・谷戸・島越・寺田・金子・小蓋山・上ノ台・九ツ井・榎坪・牛坂・坪入・株ケ下・寺前・芝後・十三塚・岩塚・相田・峰・掘ノ内・堤・相田谷・下大海・亀甲宮・柿ノ木・山王下・築山・猪小屋・土腐・鶴巻

田谷町

タヤという地名について、鏡味完二・明克の「地名語源」は、「1 開墾地においた管理人の家、2 別棟の小屋（田小屋、産屋、忌屋など）3 旅屋（特に伊勢御師の）社寺田の田屋守」などに因むものがあるといい、用字例としては「田屋、田家、田谷、田舎、他屋、多屋などがあるという。また、地理学者の吉田茂樹は、タヤという地名は各地に散見され、「万葉集（第3223）」にみえる御田屋「タヤ」の意が多く、田の番小屋のあった所をいう、とする。それらの説のいずれかとも考えられようが、田谷の地も谷戸の発達した所であり、付近の他の○○谷の地名と同じく田谷とはその名の通り谷戸の名称（田の意味は、単に田畑の田を意味するのかどうかは不明）の可能性も高いといわざるを得ないであろう。（横浜の町名昭和57年発行）

地名研究で「タヤ」は「田屋」で、「田の番小屋のあった所」を意味するという。（横浜の町名平成8年発行）

正安3年（1301）関東下知状に「相模国長尾郷田屋村内供田捌段大」とあり、田谷の文字が田屋と記されています。「正嘉3年（1259）の頃は鶴岡八幡宮の社領にして」とあるのが、田谷の初見ではないかと思います。

堤（つつみ）

信号千秀小学校の先、小雀との間一帯の地名ですが、高低差があり、谷戸鎮守の秋葉社が祀られています。「堤」の語源に「土手、堤防」などの他、

ツツム(包む)の連用形で、「山などによって周囲を取り囲まれた地」などもいうか、とあります。

峯(みね)

大面川に架かる金田橋を渡った先の松尾工務店一帯の地名が峯です。以前は小高い丘だったのが、道路改修で崩されたようです。背後は高台になっており、谷戸鎮守の諏訪社が祀られています。「峯」の語源に、山頂、尾根筋、山の峠、畦、自然堤防など周囲より高くなっている部分、などがあります。

谷戸(やと)

堀ノ内と、堤に隣接し、小雀に面して、神奈川ガスやサンライズ田谷のある辺りで「ヤ、ヤツ、ヤチ」と同じく低湿地のこととか「小さな谷地形をさす」とあります。田谷の場合、信号品川団地から、千秀小学校への坂道の途中の地名です。小学校辺りは以前は小高い丘だったが、道路改修で崩されたようです。地形から考えると「谷戸」は小さな谷地形からの地名でしょうか。

堀ノ内(ほりのうち)

千秀小学校辺りの地名ですが、この辺りは高台となっています。語源に「堀の内側」の意味で、中世、環濠を巡らせた豪族屋敷のこと。

近世の城下町で、外堀の内側の町や屋敷地をいう、その他、崖になった岡を指す、などがあります。堀の内の地名は東の方に多いといわれます。

相田(あいのた)

千秀センター辺りの地名です。語源に「河川の跡が水田になったもの」があります。田谷の相田は近くを関谷川が流れています。昭和 3 年の地番反別入圃では水田になっていますから、過去に川が流れていた跡が水田になつた地としての地名でしょう。

芝後(しばご)

常勝寺一帯の地名ですが、語源に、芝草、雑木、林などがあります。田谷の芝後は雑木が生えている所であり、「後」は接尾語コ(処)の濁音化が多いとされていますから、雑木の生えている処となります。

鶴巻(つるまき)

芝後の中に鶴巻の地名があり、昔は鶴が舞い降りてきたと地元の方は話されます。金井の玉泉寺の誠拙禅師の歌の下の句に「亀の甲山に鶴の一声」と詠まれていますから、江戸時代には田谷辺りも鶴が耕地に飛んできたのでしょう。

又、鶴巻には鶴のお墓として鶴塚があったといわれます。

十三塚(じゆうさんつか)

定泉寺一帯の地名です。現在は一基しか残っていませんが、かっては定泉寺の裏山に十三基の塚が築かれ、その十三の塚から十三塚の地名が生まれたといわれます。

「鎌倉時代、玉縄城は北條氏の前塞としての城だった。北條高時を討伐に向かった新田義貞の軍勢は、腰越より稲村ガ崎、極楽寺坂方面より討ち入り、弟、儀助は先ず前塞玉縄城を陥入れて小袋坂より侵入、北條高時は腹背に敵を受けて、遂に一族郎党百四十三人と共に現在の鎌倉雪ノ下宝戒寺裏の北條館に於いて尽く自刃して果て、鎌倉幕府は滅亡したのである。

その時、玉縄城の落武者十三人が定泉寺裏山に於いて自刃したのである。当時里人は十三人を懇ろに夫々埋葬して塚をつくったのが字名となって十三塚として残っていると伝えられる。

現在はその塚の一、二を存するに過ぎない。」田谷町郷土誌　田谷親和会より。

しかし、鎌倉滅亡は 1333 年です。玉縄城は永正 9 年(1512)に築かれています。後北條氏は玉縄城を中心に幾度か戦いを挑んでいますから、その時、亡くなった人達の霊を弔うため塚を築いたのではないでしょうか。

その他、十三仏信仰に基づく地名ではないかという説もあります。

岩塚(いわつか)

中の橋から田谷一の橋の辺りの地名です。語源に「岩で築いた塚、石垣のこと、岩の多い高み」などがあります。地元では、昔、動物の死体を埋めた所としていますから、その上に石か岩を置いたのかも知れません。

株ケ下(かぶがした)

バス停田谷辺り、大面川に面し、加藤工務店資材置き場や金子建設などのある所です。語源に同族の集団、カブ(頭)で「頭」の意味か、カブ(株)で木の根元、切り株から山の根元、山麓、などがありますが、川に面している地形から山の根元である山麓からの地名かと思います。

坪入(つぼいり)

株ケ下とは川を挟んだ反対側で、榎坪に隣接し、平地から奥は高台になっています。坪については、榎坪で記しましたが、「入」は、奥、川上、上流、山と山の間の沢、などがあげられています。これも口分田につけられた地名

だとすると、榎坪の奥に入った所としての地名でしょう。

牛坂（うしざか）

榎坪と坪入の間の地名ですが、語源の「牛」に、ウチ（内）の転か、フチ（縁）の転か、動物の牛に因むものか、牛に見立てた地名か、十二支の丑の方向（北北東）などがあります。地元の方のお話では昔、水田耕作に牛を使用したので、低地にある水田に牛を連れて行くため通る坂道を牛坂と呼んだのではないかといわれます。

榎坪（えのきつぼ）

田谷交差点近くの「大阿一の橋」を渡った左側一帯の地名で、タイヤ館や河合製作所辺りです。語源は、「つぼんだ地形、窪地、尺貫法による面積などの単位一間四方」などがありますが、この辺りでは奈良時代の班田収授法（土地の分配法）による口分田に付けられた地名と考えられています。大面川流域の肥沃な土地だったと思われ、「榎」は、その口分田に目印として榎の木が植えられていたのではないでしょうか。

九ツ井（ここのついど）

大面川に架かる大阿一の橋を渡り、チエ美容室の先の辺りの地名が九つ井です。地元に伝わる話に、「鎌倉市関谷に平戸御前という豪族の館がありましたが、高台のため、飲料水が得られず、九つ井戸が唯一つの水源だったので、番人を置いて管理させていました。番人役を仰せつかったのは司馬之助でしたが、後、武士に取り立てられ、臼井姓を与えられたといわれます。今も九つ井戸を管理し、山林を所有している臼井家はその子孫と伝えられます」。九つ井戸の地名は、谷のいたる所から水が湧き出るので数多くの井戸という意味で付けられた地名と考えられます。

上ノ台（うえのだい）

九ツ井に隣接した高台で、長尾台と相対している所の地名です。ウヘ（上）で高い方、高い所、上方、などありますが、田谷のは高い台地の地名ですから、上の台に相応しいと思います。

猪小屋（いごや）

「上の台 929 番地に城主長尾新六貞影氏の館があったと伝えられていた」（田谷町郷土誌）と記されています。田谷と長尾台の接点となる高台が上の台で、929 番地辺りを猪小屋の地名で呼ばれています。

猪小屋の語源に、小さい谷戸か、開拓地名とかがあります。長尾台地区は昭和 55 年、埋蔵文化財調査委員会が現況地形測量を含めた詳細

分布調査を実施しています。その結果、縄文・弥生・古墳・歴史時代の遺物が出土しています。「陶器片類は明らかに玉縄城以前のもので、従ってこれらの遺物は「長尾氏」が居館を構えていたとされる伝承を裏付ける例証の一つとなろう」と報告書に記されています。

報告書には長尾台と一括して記されていますが、遺跡現況地図を見ますと田谷側からの出土です。猪小屋は長尾氏の開拓した土地としての地名ではないかと考えます。

中の橋（なかのはし）

田谷交差点辺りの地名で、大面川に地名から付けられた中の橋が架けられています。「中」はある地域の地理的中央、政治・経済・行政の中心地、三分割した地の中央部、辺境と中央との間、山などの間、ありますが、田谷での位置を考えると、地理的中央からの地名ではないでしょうか。

島越（しまごえ）

岩塚と中の橋に挟まれた所の地名ですが、水田になっています。

島に、周囲を水に囲まれた陸地、島状の地、川に臨んでいる州、川の曲がり目や川端の低地などに出来た耕地、越は川の渡渉点など越える場所をいうの他、越は地名語尾として国名や地名一般の語尾につくとされています。

寺田（てらだ）

島越と中の橋に挟まれた所が寺田ですが、これも水田です。寺田では寺田のあった所、寺で、寺院、緩やかな地形、たわんだ地形などありますが、お寺の田があった所の地名でしょうか。

角田（すみだ）

これも水田の中の地名で、ラドン温泉近くで関谷川から分岐され、水田に流れこんでいる川に角田橋が架けられています。角田はこの橋の辺りで、柏尾川に向かって左側の水田の中です。語源に、中田（中央にある田）に対する角田、スミ（角）曲り角のこと、奥、端、の意味があります。

宮の前（みやのまえ）

御霊神社の前一帯の地名で、日産モーターや東英産業のある辺りです。御霊神社というお宮の前に位置する所としての地名でしょう。

山王下（さんのうした）

バス停に「山王」がありますが、ラーメン店花楽辺りの地名です。山王は日枝神社の別称であり、日枝神社を勧請した地をいうといわれます。

バス停山王からバス停金井に向かって左手の山が山王山で、かっては山王大権現を祀る日吉社がありました。
大正 12 年、神明社と共に御霊神社に合祀されましたが、今も地名として残されています。

築山（つきやま）

伊東スーパー辺りの地名です。築山は小高くなった土地でしたが、道路造成のとき、崩したので平地になってしまいました。
その土地で悪いことが続いたので築山様を祀ったことから付けられた地名といわれます。ツキ（築）・ヤマ（山）でほぼ同義反復の地名か、人工の築山にちなむか。とあります。
しかし田谷の築山は築山様という信仰からの地名でしょう。築山様がどのような信仰かはわかりませんが、現在は、石を三個重ねて御幣をおき、注連縄をしたのを築山様として山王山へ上がる途中の右側に祀られています。

亀甲山（かめのこやま）

山王下と、金井の亀甲山に挟まれた所の地名です。亀甲山については、金井で記しました。文政 9 年（1826）、代官、大貫次右衛門は亀甲山の辺りと、雲雀子の土地を提供して開墾させています。

土腐（どぶ）

山王下と亀甲山の間で、金井に面して土腐の地名があります。泥地、湿地・ぬかるみ、などがありますが、泥地で耕作に不向きな土地からつけられた地名でしょう。

小蓋山（こぶたやま）

バス停小蓋山にその名をのこしていますが、水田側の地名です。小は小さい、僅か、などがあり、蓋で、塞がれたような地形、があります。
田谷には田谷五山と称される山がありましたが、小蓋山は入っていないところから、小さな蓋のような地形からの地名ではなかったかと考えます。

金子（かねこ）

小蓋山の奥が金子です。道路から見ると田の中に住宅が見える辺りです。金子は東日本に多く見られる地名、鉱物の採鉱人がいた所とみられ、江戸期では山師の下で働く鉱夫をカナコ（金子）といったようです。その他、砂地の意味の地形地名か、砂丘、自然堤防、台地などの浸食地形か、崩壊地形かなどありますが、田谷のはどうでしょうか。

大海（だいかい）

ニコン横の水田辺りの地名ですが、大海で、近世の開拓集落をいうようです。田谷では代官大貫次右衛門が雲雀子の地を開墾させていますから、その関連の地名ではないでしょうか。地元では大海は水田としては下田で実りが悪いといわれます。

雲雀子（ひばりこ）

現のニコン 511 号館横辺りの地名です。かっては畑と葦が茂っていて、雲雀が多くいたのではないかと地元の方は話されます。

参考文献

横浜の町名　昭和 57 年　横浜市民局
横浜の町名　平成 8 年　横浜市民局
横浜市史
鎌倉市史
広辞苑
古語辞典
田谷郷土誌
本郷村地番反別入圖
とよだその風土と歴史
桂・公田歴史カルタと史跡探訪
角川日本地名大辞典　神奈川県
市町村名語源辞典
地名用語語源辞典　楠原佑介・溝手理太郎著
日本地名語源辞典　吉田茂樹著
地名の語源　鏡味完二・鏡味明克著
地名語源辞典　山中襄太著
日本自然地名辞典　山口恵一郎編
鎌倉の地名由来辞典
新編相模國風土記稿
皇国地誌
昔の上郷の思い出
飯島の記録
豊田村地番反別入圖
笠間四百年のあゆみ
神奈川県の地名
本郷の地名考
六人会の道案内 10

監修　北條祐勝先生

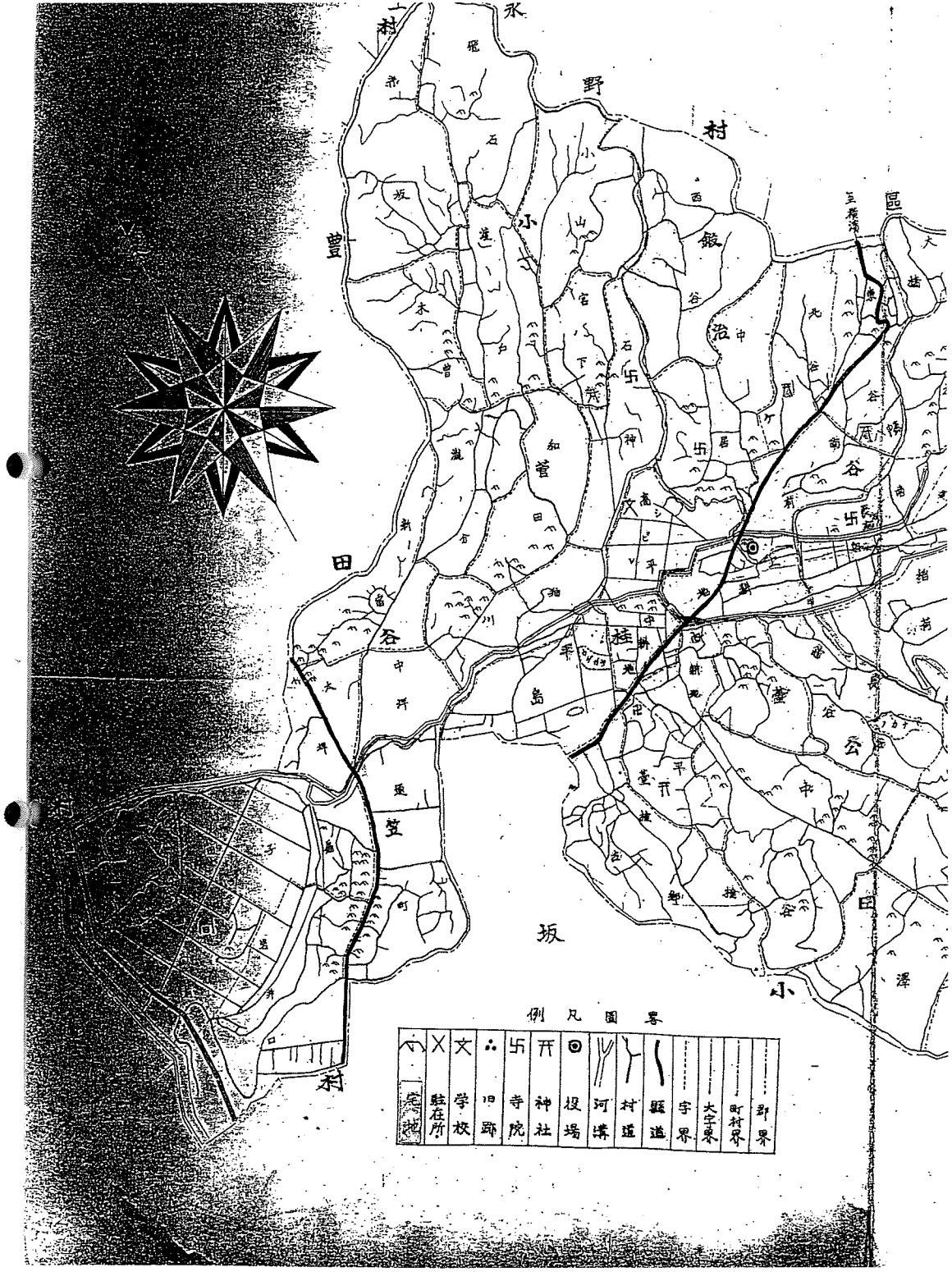
協力して下さった方
角田正輝様　長沼竹雄様　関昌憲様　大谷宏充様　故浜野久雄様
故矢島慶蔵様　椿正雄様　椿きょう子様　飯島春雄様　矢島雅治様

吉野忠義様　吉野継輔様　小巻伊助様　浅野和江様　石山義治様
高田良活様　戸原文子様

私はこの 20 年の間、北條祐勝先生をはじめ、長瀬先生、菊田先生から栄区の歴史について多くのことを学ばせて頂きました。
その中で地名のもつ大切さを知り、この「栄区の地名の由来を考える」を調べるに至りました。
又、地名を調べるにあたり、地元の大勢の方々のご協力も頂きました。
以前、開発前の地形などを教えて下さった方の中には亡くなられた方もいらっしゃいます。教えて頂いたことを私のノートに記したまま眠らせていて良いのだろうか、それでは教えて下さった方に申し訳ないのではと思うようになりました。
又、地名の元となっている地形や、語源を知っている方が少なくなり、今記しておかなければどんどん解らなくなるのではとも思いました。
何方かが、この地名について記して下さらないか、お待ちしていたのですが、それもないようなので、微力も省みず思い切って記しました。
「栄区の地名の由来を考える」について、間違いのご指摘、ご叱責、情報など頂ければ何より有難いです。
様々にお教えくださった北條先生、ご協力下さった皆様に感謝し厚くお礼申し上げます。

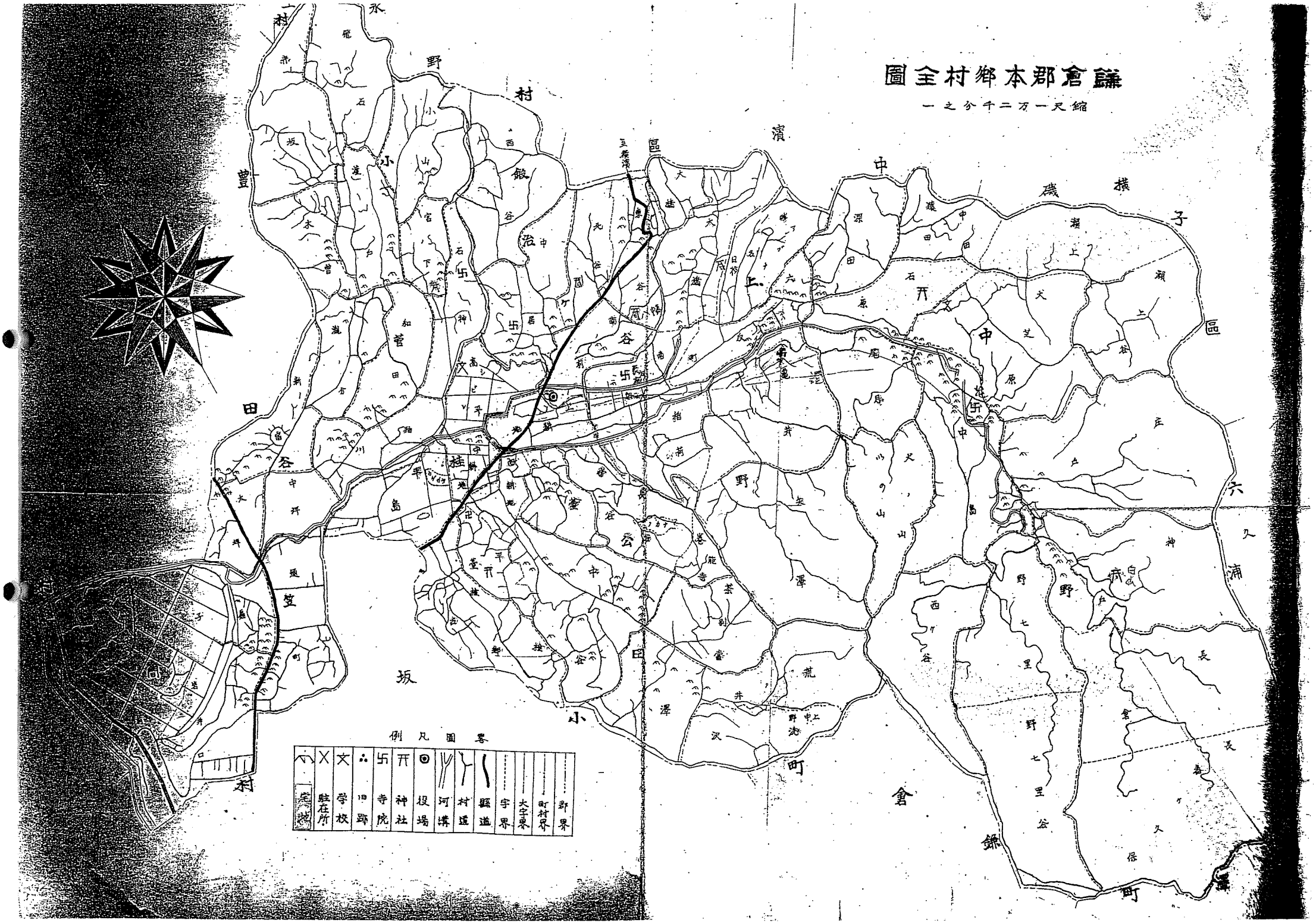
文責　六人会　高野紀美子

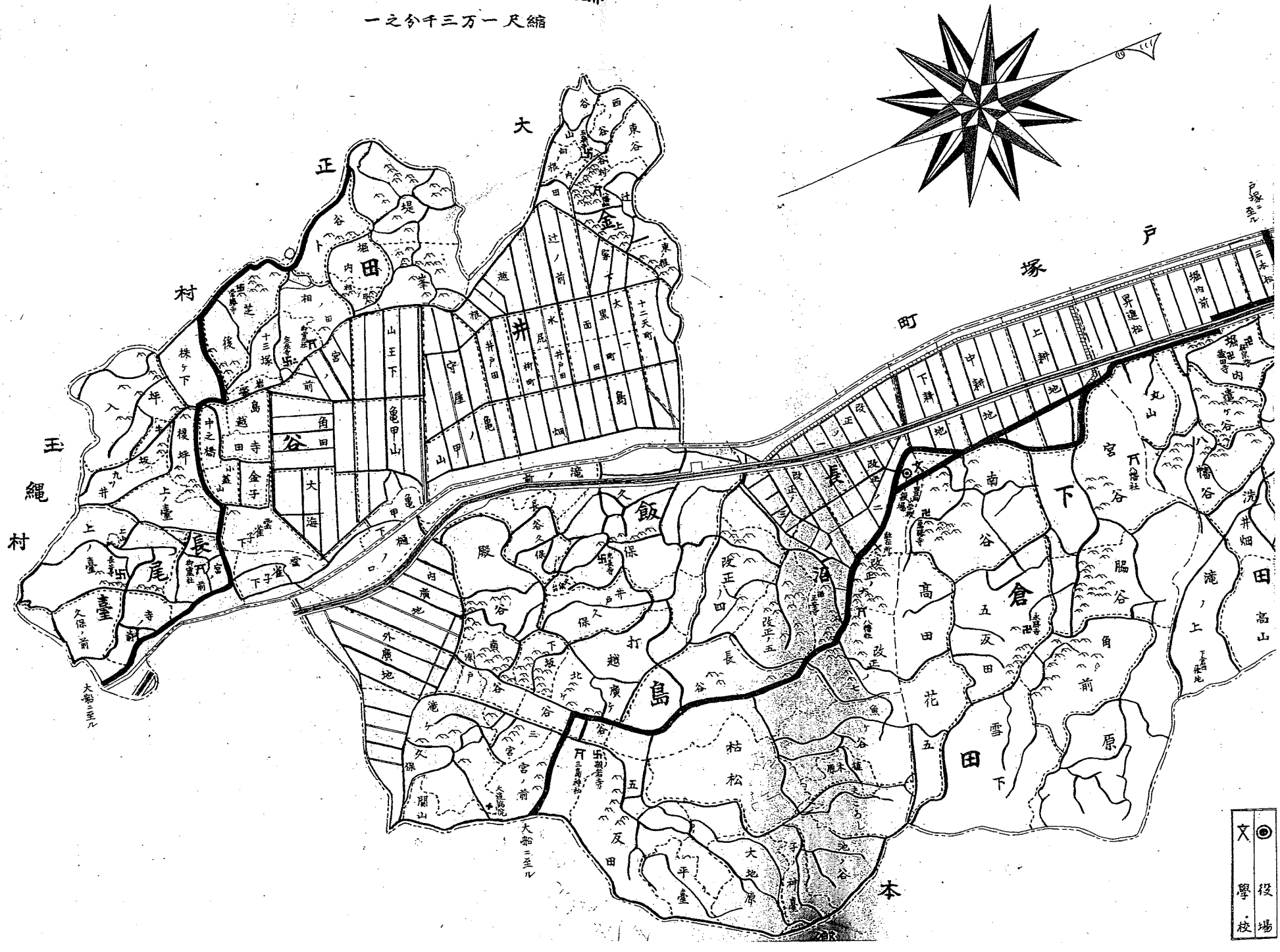
平成 19 年 11 月



鎌倉郡本郷村全圖

縮尺一万二千分之一



鎌倉郡豊田村全圖

縮尺一万三千分之一